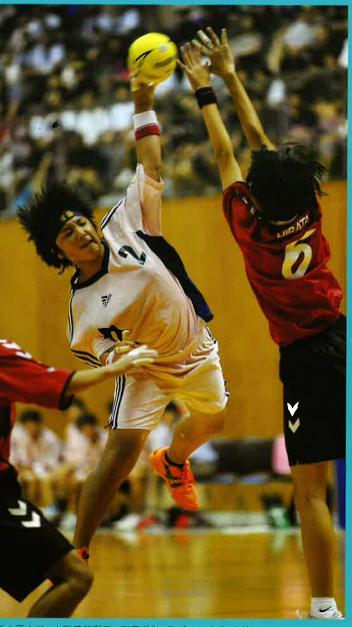
公益財団法人 日本ハンドボール協会編　平成25年 11月1日発行（毎月1回1日発行） 通巻539号

ハンドボール

11
NOV. 2013 No.539

特集
第5回男子ユース世界選手権
第42回全国中学校大会
第40回全国高等専門学校選手権大会

［表紙写真］全国中学校大会男子優勝の神森中学・豊里友輔選手（左）、女子優勝の西中原中学・山田美穂選手：写真提供・スポーツイベント社

公益財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.jp/

東京オリンピック決定を受けて

公益財団法人 日本ハンドボール協会強化本部長　**津川　昭**

東京オリンピック決定は、女子ユースアジア選手権の滞在先であるタイ・バンコクで知りました。

「やったー」という熱い感動と、世界のハンドボールが東京で見られる、そしてその中に日本チームがいるなんて…、身体が震えるような衝撃が走りました。

アジア選手権の試合会場では、アジアハンドボール連盟役員始めいろいろな方から「おめでとう」の言葉を頂き、改めて実感が湧いてきました。

しかし感動とは裏腹に、一方で事の重大さとその渦中に自分が居ることへのプレッシャーが大きくのしかかって来ました。地元のオリンピックで日本チームがどれだけ活躍が出来るか？　まさに日本ハンドボール界の盛衰が懸かっているといっても過言ではないと考えています。

昨年７月から専任としての強化本部長を拝命し、代表からU-16、ジュニアアカデミーまで、全てのカテゴリーの活動状況や、あるいは大会に帯同し、強化の進捗状況を見てきましたが、スポーツ界、ハンドボール界を取り巻く環境として様々な課題が見えてきました。大きなことは文部科学省やJOCに委ねるにしても、ハンドボール界で対応しうる問題は早急に対策を進めなければなりません。

スポーツ基本法の施行、東京オリンピック、スポーツ庁設立案等々、長期に渡るデフレ社会、少子高齢化社会、東日本大震災など、自信を失いかけた日本を、スポーツの力で復活させようという流れがあります。我々のハンドボールが、その流れから取り残されるかどうか正念場を迎えているように思います。

とにもかくにも東京へオリンピックはやってきます。日本のハンドボールが常時オリンピックに出場し、世界の強豪と渡り合えるようになれるかどうか、最初で最後のチャンスではないでしょうか？　勿論、強化は先端を突っ走りますが、もうこれは日本ハンドボール界あげての「総力戦」だと認識しております。

皆様に「夢と希望」を感じて頂けるチームづくりに邁進してまいります。今まで以上のご支援を、よろしくお願い申し上げます。

第5回 男子ユース世界選手権

5th Men's Youth Handball World Championship

最終順位

金：デンマーク	13位：フランス
銀：クロアチア	14位：エジプト
銅：ドイツ	15位：カタール
4位：スペイン	16位：オーストリア
5位：ノルウェー	**17位：日本**
6位：スウェーデン	18位：アルゼンチン
7位：セルビア	19位：チュニジア
8位：スロベニア	20位：ベネズエラ
9位：ブラジル	21位：韓国
10位：ハンガリー	22位：アンゴラ
11位：ルーマニア	23位：ガボン
12位：ベラルーシ	24位：チリ

第5回男子ユース世界選手権報告

団長　近森 克彦

昨年バーレーンのアジア選手権で出場権を得た世界選手権大会は8月10日から23日迄ハンガリーで行われました。インターハイ最終日の深夜という、いささか強行なスケジュールで、大会まで到着日を入れて5日しかない慌ただしい中出発しました。幸い午前の到着であったので午後体ならしのトレーニングが出来たことは時間を無駄にしなくて済みました。本来ならば時差、気候又初めてのヨーロッパチームとの対戦する前に体格差（高さ、力）に慣れるため事前に数多くの試合をこなして本番に臨めるのが理想でしたが国内大会との調整が出来ずやむを得ない日程となりました。

トレーニングマッチを3試合した後大会を迎えた訳ですがこれらの試合は調整に過ぎず慣れまでは到底出来ませんでした。（ちなみにカタール、エジプト等は1カ月前からクロアチアで練習、試合をした後大会に臨んでいた）会場はブタペスト郊外のブダロス、エルドの2会場、2グループで行われ日本は全試合ブダロスで試合した。少し意外だったと思ったのは世界選手権をこの観客席の体育館でと。ブダロス800席、エルドで2000席。世界選手権でもユースの大会はこの程度なのか？選手団はすべて同じホテルで宿泊、食事。イスラムの国も同宿したが問題なく終わった。日本チームの選手係りは日本語が堪能な大学卒の若い人で選手共々コミュニケーションよくとれ本当に助かりました。

さて大会に臨み我々は目標を次回の大会出場権ある10位以内と掲げミーティングで確認した上予選リーグに臨みました。しかし結果は残念ながら一歩及ばず予選リーグ突破と先に掲げた目標を達成できず下位決定戦に回ることとなりました。予選リーグ1戦目、対デンマーク、前半28分まで同点の接戦で進んだが残り2分相手が退場する中、逆に立て続けに失点してしまった。後半も10分までは一進一退の攻防が続いたが徐々に集中力が衰えずるずると差をつけられ敗退してしまった。2戦目対エジプト、残り5分で2点リードされていたが相手が勝ちに出てきてミスを攻撃につなげたが3本連続のノーマークシュートを外し破れてしまった。勝てる試合をみすみす逃してしまった。3戦目対セルビア、高さのない日本に対してロングシュートは高さで対応するとの意図で、ゴールラインでの一線防御シフトをされ、為に攻撃が単調になり速攻にも繋げられず敗退。4戦目対ベラルーシ戦もセルビア戦と同様なデフェンスを敷かれ攻めきれず敗退。セルビア、ベラルーシ戦とも高さに対し人的、技術的に不足を認めざるを得ない。

この結果チリには勝利したものの1勝4敗で予選リーグ終了。下位決定戦に回りチュニジア、アルゼンチンに勝利したものの17位という結果に終わった。少数の選手は技術において平均以上ではあったがやはりチーム総合力では残念ながらこの順位をよしとせざるをえない。決勝はデンマークとクロアチア。後半終了直前クロアチアが追いつき延長戦に突入したが実力に勝るデンマーク、延長戦は一方的に得点を重ね優勝した。両チームだけでなく例えばセルビアにもこの年齢で、ブンデスリーグで活躍していた選手がいる等シニアクラスの選手は数多くみられ各国の層の厚さ、レベルの高さを窺い知ることができた。

＊大会を通じての後感

【審判について】比較的若いペアーが多かった中では力量不足は感じなかった。しかし決勝戦はベテランペアがあの興奮状態の中スムーズに進行させていたのはさすがと感じた。今大会唯一乱闘を含めて後味の悪い荒れたゲームがチュニジアとカタール戦であった。カタールにはチュニジアからの帰化選手がおりそれが原因と思われるが、結果的には裁定委員会で両チーム6人が試合停止処分を受けていた。

【代表スタッフ】今大会が代表スタッフとして初の世界選手権の中、練習、試合において選手の能力を把握しそれをどう発揮させるかに努力していた。しかし全体的には事前の情報の収集、分析、対策において資料がないとはいえ不足していたのではと感ずる。突然大会に行っても初めて対戦相手を見るようでは遅い。このことはスタッフに問題があるのではなく日本協会全体の課題でもあると思う。

【今後とるべき事】今回対戦したヨーロッパの各チームは予想していた以上に大型化しており、2メートル以上がチームには3～4名おり平均身長、体重で大きく差をつけられていた。こうした相手との試合は日本チームが対戦して実感したように攻撃、防御共相当な体力が求められる。接触を避けら

れないスポーツであるし、体力の消耗は激しい。また相手の1歩に対して2歩動かねばならないハンディもある。各試合とも40分迄互角に近い試合が、その後20分で差をつけられていることは、体格に劣る日本選手の体力の消耗度はそれだけ大きいことが分かる。国内の試合での消耗度に比べて1.5倍位あるのではと思う。スキル、技術のアップを図るのは当然ながら、やはり多くの外国勢との試合を通して高さ、力強さを実感して試合と心のスタミナを作ることが必要に思う。又、指導システムも一貫した体制の構築と実践で各層の底上げ、それに伴う日本のチーム力が是非とも求められる。例えば見聞した今回の優勝国デンマークを参考にすると、この国があらゆる世代において世界の最上位を維持し結果を残していることが理解できる。今回の監督は代表チームの監督でもあり、次世代選手も次なるステップでの選手の把握と育成をしている。又、スタッフの役割分担も明確で、例えばゴールキーパー専任コーチは大会期間中各チームの選手のシュートを分析し任され選手に指示できる。監督は勝つための選手起用、作戦に専念してゆくことが可能になる。こうして監督とスタッフの信頼関係でのチーム力が強化されている。こうした事が参考になればと記してみた。

最後に昨年より今大会まで合宿、遠征と多くの時間をユースチームに派遣してくださった各学校の関係者の皆様のご協力に、心より御礼申し上げます。又、遠路応援に駆け付けてくださった選手の家族の皆様にも御礼申し上げます。これからも若い世代の育成に何卒宜しくお願いします。

世界ユース選手権を終えて

ユース日本代表監督　滝川一徳

はじめに

おかげさまで男子アンダーカテゴリーにおいて28年ぶり、ユース（U19）としては初の世界選手権に参加し、以下に述べる多くの収穫と課題を持って無事に帰国できました。

大会参加にあたり、東西インカレ、インターハイや国体ブロック予選など過密スケジュールの中、選手を快く派遣して下さいました所属チームの皆様、遠征に際し色々とご配慮頂きました津川強化本部長はじめ協会スタッフの皆様、強化合宿で大変お世話になりました大崎電気様はじめ日本リーグ所属チームの皆様に心より御礼申し上げます。

大会に向けての強化期間

昨年９月のアジア選手権で代表権を獲得して以降、以下の日程で強化を進めてきました。

第１回強化合宿　平成24年12月13日（木）～18日（火）ANTC
第２回強化合宿　平成25年1月15日（火）～20日（日）
JHL ウィンターキャンプ
第３回強化合宿　平成25年4月22日（月）～25日（木）ANTC
第４回強化合宿　平成25年5月25日（土）～29日（水）ANTC
第５回強化合宿　平成25年6月24日（月）～30日（日）ANTC
第６回強化合宿　平成25年7月10日（水）～15日（月）ANTC
※延34日間

インターハイ終了直後に集合。（興南・不来方・藤代紫水の選手は福岡～羽田～フランクフルト～ハンガリーという強行スケジュールでしたが…）現地入り後ハンガリークラブチーム、カタール、チュニジアとトレーニングマッチをこなし大会に突入しました。

強化施策

1．190㎝クラスの玉川、安倍、岡松、瀧澤をDFの軸に斉藤、助安、藤、康本らで中央を固め、スイッチDFおよびプレスDFを併用する６－０DFの構築
2．田中、徳田、藤ら178㎝クラスではあるがスピード、テクニック、シュート力、間合いに秀でた選手を軸にパスのスピード、ポジショニングをベースにテンポの変化、方向変換、クイックシュートを多用したOFの構築
3．日本が世界に誇れる速攻、クイックスタートからの得点力アップ
4．日本の良さである「粘り強さ」「芯の強さ」「和の強さ」を世界の舞台で表現する

世界との僅かな差と大きな差

初の世界選手権、ましてや欧州勢と戦う経験が皆無であった選手にとって、大きな財産となるであろう相手との戦いができたことは本当によかったと思います。私も驚いたのですが、初戦のデンマーク戦終了後に選手が記者に話した内容は「やれる」「通用する」といったポジティブなコメントでした。そして何より「楽しい」と。日の丸を背負って戦いながら敗戦して「楽しいとは何だ？」とお叱りを受けるかもしれませんが、選手にとってはそれが本音であったと思います。中東勢よりもさらに体格のある200㎝・100㎏の選手達が、中東の選手とは違ったさらにハイレベルなテクニックとスピードを持ち合わせた相手との戦い。選手がどこまで自分たちの力を試せるかといった観点からすれば、胸が躍るような気持ちであったであろうと感じます。実際優勝したデンマークとの戦いをはじめ負けはしたもののエジプト、セルビア戦など後半10分までの戦いは、十分にトレーニングしてきたことをコート上で表現してくれました。勝利したチリ、チュニジア、アルゼンチン戦はそれが60分間出せたからこその結果であったと思います。

しかしながら、後半の残り15分以降にやってくるデンジャラスタイムは、フル代表以下日本の課題とされている「フィジカル」だけの差ではなくなってきているのも現状です。もちろんこの「フィジカル」を獲得しDFのコンタクトでスタミナを奪われないことは最も重要ではあります。この部分

の継続強化は最重要の課題であることは間違いありません。ですが今回さらに必要性を感じたのがスタッフの分業制とアナリスト（ゲーム分析班）の存在です。フィジカルで劣った上にハーフタイムで丸裸にされるシュートコースや１：１の癖。出場24チーム中20チーム近くはアナリストが存在していました。たまたま出場した全チームが同じホテルでの生活であったため､その存在の大きさを知ることができました。そしてスタッフの分業制、特にGKコーチはどの国にも存在しています。これらも一つの課題として今後に活かさなければならないと感じました。

世界との差を縮めるために

私が率直に思った感想を述べさせて頂きます。私は日本の中学・高校・大学あるいは日本リーグチームの方が戦術的にも豊富であり、指導者の方々も知識やアイデアも豊富であると世界選手権を通して確信しました。例えば準々決勝以降の試合を見ていても、戦術においてあっと驚かされることはあまりありませんでした。

しかし「個」の力には何度も何度も感心させられました。もちろん「個」の強さはチーム力に反映されますが、何に感心したかというとトップチーム選手には良き習慣が備わっているということです。例えばパスのスピード、バックステップ、ポジショニング、０から１歩でのシュート、DF時の足の向き（方向性）やハンズアップやコンタクトの仕方など、とにかく私を含めたスタッフが口うるさく選手に伝えてきたことを、当たり前のように60分間継続してできている選手達の集団という印象です。パワーは後天的につけることはできても、これらの「良き習慣」いわゆる「GOOD HABBIT」をつけるには常日頃からの意識付けが大切になります。私は「良き習慣」と「フィジカル」の二つを身につけられる環境が備われば､世界との差は確実に縮まる気がしてなりません。日本の選手が持ち合わせる「勤勉さ」「ひたむきさ」「素直さ」は世界一なはずですから。

強い思いを持って

今回の世界選手権に出場し最も強く感じたことは、この場に立ち続けることこそ世界との距離を縮める一番の方策だということです。アンダーカテゴリー世代からアジア予選突破は最低限のノルマとできる強化環境を構築し、常に世界を身近に感じながらフル代表へのステップを踏んでいくことが最も重要であると感じました。

そのために「何をすべきか」「何ができるか」を一人ひとりが当事者意識を持って考えていかなければならないと思います。世界は特に「個の育成」において「待ったなし」で進化しています。「僅かな差」を感じた部分と「大きな差」を見せつけられた大会でありましたが、この差を埋めるだけのエネルギーは日本のハンドボール界には十分にあると確信しています。サッカーが「ドーハの悲劇」「ジョホールバルの歓喜」を経験し今があるように、日本が世界をあっと言わせる時は必ず来ると信じています。

最後になりますが、世界選手権出場にあたり多くの方々に御指導頂き、あるいは熱いご声援を頂きましたこと、この場をお借りして厚く御礼致します。また、力不足の私を支えてくれた山口・内記両コーチと選手のプレー環境を整えてくれた飯田トレーナー、そして我々スタッフ・選手を厳しくも、これ以上ない温かさでここまで導いて頂きました近森団長には感謝の気持ちでいっぱいです。

2020年東京オリンピックの時に今回の選手達は26歳になっています。と同時に今回対戦した相手もさらに凄みを増して東京にやってくるでしょう。今回の世界選手権に出場した素直でひたむきにコツコツ頑張ることのできる選手達が、この経験を大きな糧として東京での主役になることを期待し、世界選手権の報告とさせて頂きます。本当にありがとうございました。

世界選手権大会に参加して

男子ユース主将　助安 功成

初の世界選手権、17位（プレジデントカップ優勝）という結果でしたが、世界との壁を感じることができました。

ヨーロッパの選手は2m・100kg以上で日本人とは全く違った体格であります。日本人の大型選手は小柄な選手に比べてテクニックやスピードでは負けているが、ヨーロッパの選手は大きくても、テクニックやスピードがありました。日本が世界に出ていない間に、日本は世界に益々おいていかれているのだと私は思いました。

欧州でプレイされている銘苅さんがネットで日本人が世界と戦えるようになるには、自分達の世代から日本リーグに実業団同様に参加できるようになり、高いレベルでハンドボールをしないといけないと言っていました。私もその通りだと思います。学生なので難しいことだと思いますが、勝つにはそこまでしないといけないと思いました。若い世代から上の世代と戦い少しずつ差を縮めていかなければならないと思います。東京オリンピックが決まり日本でもヨーロッパ同様ハンドボールがメジャーになってほしいです。また私たちがちょうど26歳、東京オリンピックで活躍できるようにこれからも努力していきたいと思います。

周りから何を言われようが、世界で戦った私達にしかわからないことが沢山あります。この壁を乗り越えて世界に負けないようにしたいです。17位で終わった悔しさを忘れず次々と進化していきます。これからも応援よろしくお願いします。

近森団長はじめスタッフの皆様、そして支えて下さった多くの皆様、本当にありがとうございました。

戦　評

《予選ラウンド》

■８月10日（土）

日本　27（14－17、13－22）39　デンマーク

初の世界選手権、初戦の相手は前回大会優勝の強豪デンマーク。立ち上がりは互角のスタート。10分まで徳田のミドル、速攻や玉川のポストなどで７対７。ここから先に抜け出したのはデンマーク。積極的なDFを試みるも高さだけでなく視野の広さも兼ね合わせる相手BP（バック・プレイヤー）陣に崩され７対９とリードを許す。粘る日本は西出の好セーブ、齊藤のサイド、藤のカットインなどで16分過ぎに11対10とこの試合初のリードを奪う。ここから一進一退の攻防になる。残り２分14対14の同点。ここで相手選手の退場とチャンスがくるも相手のポスト、ミスからの速攻、抜かれてはいけないアウトサイドへのカットインで３連取を許し前半を３点ビハインドで終了。ハーフタイムで十分食らいついていけることを確認し後半に突入。

後半立ち上がり田中のカットインで15対17、ここから激しい攻防が続き８分で20対21。その後は相手の巧みなサイドやDS(ディスタンスシュート）で崩されるも残り５分まで27対32の５点差でついていく。タイムアウトで攻撃回数を減らし最小限に点差を抑えることを確認するもゲームスタミナの課題もありイージーなシュート、パスミスからの速攻で怒濤の７連取。勝負所を熟知し一瞬にしてたたみかけてくる強豪国の底力を見せつけられた。

前半終了時のパワープレーのチャンスを生かし切れなかったこと、後半終了間際のゲーム運びが悔やまれる結果となった。しかしながら試合終了後の選手からはやれる、やれそうだという頼もしい声が上がり、次戦に向けて前向きに進んでいきたい。

［個人得点］徳田：９点、田中：６点、藤・玉川：４点、齊藤・瀧澤：２点

■８月11日（日）

日本　36（16－16、20－22）38　エジプト

予選リーグ２戦目は前日チリに大勝し、厳しい戦いが予想されたエジプト。立ち上がりからエジプトはエース徳田を厚く守る変則５－1DF。攻撃のリズムをつかめない日本はイージーなDS、テクニカルミスから速攻を許し７分、２対６とリードを許す。タイムアウト後は攻撃を立て直し闘志溢れるDFから田中、藤、安倍らがよく走り26分14対14の同点とする。ここで藤が退場し14-15とリードを許すも徳田の速攻で追いつき、さらに相手の退場もあり16対16の同点で前半終了。

後半立ち上がりは徳田、藤のDS、玉川、安倍の速攻がよく決まり相手退場時に齊藤が決め６分22対19と３点のリードを奪う。一気にたたみかけたい日本であったが、相手はここから強引な力任せの１：１に攻撃のきっかけを変えてくる。安倍、助安が退場するなど苦しい時間帯が続き６連続失点。22対25と逆にリードを奪われる。タイムアウト後の日本は康本の気迫のこもったロングシュートが立て続けに決まり29対32と食らいつく。残り時間を考え勝負所で田中を前に出す５－1DFにシフトチェンジ後DFからの速攻がよく出るもノーマークシュートを立て続けに阻止され点差を詰めることができず２点差で敗れた。デンマーク戦同様後半10分過ぎからの体格差を利用した攻撃を食い止めることができなかった。

予選リーグ残り３試合。厳しい戦いが続くが１試合ごとに体格差にも慣れつつあり、デンマーク戦で露呈した後半の後半での課題もキャプテン助安、田中らが中心となって闘志むき出しに克服しながら戦っている。次戦は強豪セルビア。コンディションを整え立ち向かって行きたい。

［個人得点］田中：10点、徳田：７点、安倍：４点、康本・岡松：３点、齊藤・藤・玉川：２点、助安・瀧澤・屋比久：１点

■８月13日（火）

日本　29（13－17、16－20）37　セルビア

予選リーグ３戦目。ブンデスリーグのハンブルグに所属する選手を擁し、日本の選手が体格的にも圧倒的に劣る強豪セルビア戦。高さを活かし６ｍライン付近でディフェンシヴに守る相手に対し攻めあぐむ日本だが、ミーティングで確認した通りサイド、ポスト、カットインで攻撃の糸口を探る。岡松のサイド、田中のステップ、カットインで得点するも予想以上のパワフルなロングシュートを中央付近からたたき込まれ５対11と劣勢が続く。その後は田中、徳田、藤が粘りのある得点をあげ、DFも中央二人を交代で使うなど食らいつき13対17の点差で折り返す。

パワープレーの状態から後半に突入。14対17と３点差に縮めるもその後力任せのカットイン、12ｍ付近からのロングシュートを打ち込まれ19対30と残り13分大きく差を広げられる。GK友兼の好セーブとともにリズムが出てきた日本は金内、岡松、瀧澤の速攻で８点差まで差をつめるも、最後まで中央付近のパワフルなプレーを止めきれず、29対37で敗退した。

大型選手にディフェンシヴに守られ、逆に力任せのプレーで失点するという日本チームが最も苦しむ試合展開となってしまった。予選リーグ残り２戦。目標としてきた予選リーグ２勝をあげるためには負けられない戦いが続く。日本として「ありたい姿」ではなく「あるべき姿」を試合で出そうとミーティングで確認し、チーム一丸となって目標達成に邁進したい。

［個人得点］田中：９点、徳田：７点、岡松：５点、瀧澤・安倍：２点、庄子・金内・藤・玉川：１点

■８月14日（水）

日本　37（16-12、21-12）24　チリ

前の試合でセルビアがエジプトに勝利したため残り２連勝することで決勝トーナメント進出の可能性が残り、負けられない戦いとなった予選リーグ４戦目チリ戦。体格はあるものの今までの３試合と比べると身長がないためミーティングでDFラインの徹底を確認し試合に臨む。立ち上がり相手のテクニカルミスを玉川、徳田の速攻につないで10分６対２とリードする。ターンオーバー時の相手プレッシャーからミスが出てなかなか一気に突き放すことはできないものの相手退場時に岡松、齊藤らがサイドからよく沈め19分12対５と優位に進める。田中、藤のポイントゲッターにマークが厚くなり攻撃リズムを崩した日本は３連続失点。12対８となる。タイムアウトで立て直した日本は今野、田中で加点し前半を４点リードで折り返す。

後半の体力的な要素に不安があるものの、この日の日本は今までにない強い気持ちで後半に入る。立ち上がりテクニカルミスでリズムに乗れず10分20対15とお互いに加点する。その後相手退場時に相澤のトリックプレーやサイドでリズムをつかみ、田中のカットイン、玉川、安倍のサイドなどで残り10分28対19と大きくリードする。ここから助安、瀧澤、徳田、今野、安倍が次々に得点し13点差で世界での１勝をつかみ取った。

予選リーグ最終戦は強敵セルビアに勝利しているベラルーシ。勝てば決勝トーナメント、敗れれば下位の順位決定戦という厳し

い戦いになる。アジア予選で地元バーレーンに延長1点差で勝ち、世界への切符をもぎ取ったあの試合を思い起こし、土俵際での勝負強さを出したい。日本で応援して下さるたくさんの方々の思いを胸に目標であった2勝を成し遂げ決勝トーナメントのコートに立ちたい。

[個人得点] 田中・徳田:6点、安倍:5点、藤・玉川:4点、今野・相澤:3点、齊藤・瀧澤:2点、助安・岡松:1点

■8月16日（金）
日本 23（13－19、10－20）39 ベラルーシ

決勝トーナメント進出をかけた重要な試合。お互い試合前から緊張感が漂う。大型選手を揃える相手は当然ディフェンシヴな6－0DF、攻撃は力ずくのカットインでDFラインを下げたところをディスタンスシュートで攻撃してくることは十分に予想され、その対策を練って日本はゲームに臨む。予想通り1:1でDFラインを下げられディスタンスシュートを打ち込まれ開始5分0対4と苦しいスタート。ここから日本は徳田、田中、玉川、岡松らで加点し18分10対12と盛り返す。その後、相手のステップシュートをことごとく決められ13対19で折り返す。

DFのシフトチェンジを準備し後半に入るが開始早々6連取されここから日本は変則4－2DFを試みる。しかしながらライン際が広くなったスペースを力ずくの1:1で崩されペースがつかめない。徳田、玉川、田中、安倍らで得点を重ねるも、相手のパワフルな攻防に糸口をつかめず、試合終了となった。世界との大きな差を見せつけられた試合となった。次戦はトレーニングマッチで敗れているチュニジア戦。17～20位決定戦となるが、初の世界チャレンジで一つでも順位を上げ、未来につながるゲームをしたい。ロッカールームで悔し泣きする選手達。今できることを最大限にコートで発揮することを確認し次戦に臨む。

[個人得点] 徳田:6点、田中:5点、岡松:3点、玉川・安倍・庄子:2点、藤・瀧澤・今野:1点

《プレジデントカップ》
■8月18日（日）
17－20位決定1回戦
日本 43（23－15、20－16）31 チュニジア

本番前のトレーニングマッチで31対36で敗れているチュニジアとの17～20位決定戦初戦。予選リーグで4敗し決勝トーナメント進出は絶たれたが、1つでも順位を上げて次につなげることを再確認し試合に臨んだ日本。積み重ねてきたこと、日本のスピードをここで見せつけるべくゲームに入る。立ち上がりから相手ミスを速攻につなぎ田中、岡松で3対0とリードする。相手のラフプレーから得た7mを田中、徳田が落ち着いて沈め15分14対8と優位に進める。その後田中、徳田、安倍で4連取もあり19対11。一進一退の攻防で前半を8点リードで折り返す。

ハーフタイムでゲーム運びを確認し後半に入る。後半立ち上がりはお互いが点を取り合う展開。安倍のロング、岡松の速攻、相澤のサイドなどで加点するも25対19と6点差に詰め寄られる。ここから日本は相手退場時に徳田、相澤が連続得点し残り10分35対25の10点差とする。最後は康本、安倍、庄子、今野らが加点し試合終了。積み重ねてきたトレーニングの成果が存分に出て、スピード感溢れるゲーム展開ができたゲームであった。次戦は17～18位をかけてアルゼンチン戦に臨む。初の世界選手権最終戦。チーム一丸となって勝利をつかみとりたい。

[個人得点] 徳田:9点、田中:8点、安倍:6点、齊藤・岡松:4点、相澤:3点、藤・今野・玉川:2点、助安・康本・庄子:1点

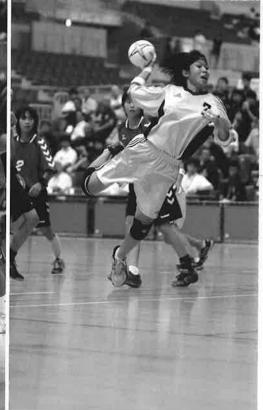
■8月19日（月）
プレジデントカップ決勝戦
日本 42（18－16、24－20）36 アルゼンチン

17-18位決定戦となるプレジデントカップ決勝戦。次のステージに向けてのスタートという位置づけで最終戦に臨んだ日本。立ち上がりは岡松、齊藤、徳田らで得点するも相手の体格を活かした力強いカットインプレーに苦しみ互角の展開。先に抜け出したのは日本。藤、田中らのスピード溢れる速攻、クイックスタートが決まりだし15分、12対7と主導権を握る。そこから相手の強引なカットイン、ポストを食い止められず25分14対15と逆転を許すが、徳田の速攻、安倍のDSなどで食らいつき18対16の2点リードで折り返す。

ハーフタイムに残り30分このチームが積み上げてきた「らしさ」を出そうと再確認し後半に突入。立ち上がりは両チームとも得点の取り合いが続き10分25対22と緊迫感のあるゲームが続く。15分過ぎから田中、藤らの速攻で30対25とリードする。世界で戦い、40分過ぎからのフィジカルの差に勝敗を左右されてきた日本だが、強いハートで苦しい時間帯を乗り越え、安倍の渾身のDSやサイド、相澤の切れのあるサイドなどで突き放し、残り5分36対31。最後はチームの核である田中、徳田が一気に勝負を決めるシュートをたたき込み41対34。リーダーシップを発揮しこのチームを牽引したキャプテン助安の7mも決まり42対36で勝利した。

プレジデントカップ決勝ということで試合後のセレモニーではトロフィーが授与され、会場では君が代が流された。誇らしげに国歌を斉唱し、初の世界チャレンジは幕を閉じた。予選で2勝し決勝トーナメント（ベスト16）に進出するという目標は成し得なかったが、厳しいアジア予選を突破し初のチャレンジで最後まで勝利にこだわり、日本人の「粘り強さ」「芯の強さ」「和の強さ」をコートで表現し続けてくれた選手達は本当に素晴らしかった。

[個人得点] 徳田:14点、田中:8点、安倍:6点、藤:5点、齊藤・相澤:3点、岡松:2点、助安:1点

第42回 全国中学校ハンドボール大会

2点共　写真提供：スポーツイベント社

■最終順位

【男子】

優　勝　浦添市立神森中学校（沖縄県）

準優勝　氷見市立西條中学校（富山県）

３　位　周南市立岐陽中学校（山口県）

　　　　名古屋市立滝ノ水中学校（愛知県）

【女子】

優　勝　川崎市立西中原中学校（神奈川県）

準優勝　岩国市立平田中学校（山口県）

３　位　京田辺市立大住中学校（京都府）

　　　　名古屋市立平針中学校（愛知県）

■優秀選手

	氏名	学校	都道府県
男子	奥原　龍之介	浦添市立神森中学校	沖縄県
	平仲　航	浦添市立神森中学校	沖縄県
	豊里　友輔	浦添市立神森中学校	沖縄県
	太田　龍	氷見市立西條中学校	富山県
	林　祐弥	氷見市立西條中学校	富山県
	本谷　力	名古屋市立滝ノ水中学校	愛知県
	坂根　大勢	周南市立岐陽中学校	山口県
女子	渋佐　知里	川崎市立西中原中学校	神奈川県
	山田　美穂	川崎市立西中原中学校	神奈川県
	中村　風夏	川崎市立西中原中学校	神奈川県
	山本　早紀	岩国市立平田中学校	山口県
	吉田　真紀	岩国市立平田中学校	山口県
	鈴木　優香	名古屋市立平針中学校	愛知県
	南　夏津美	京田辺市立大住中学校	京都府

全国大会を終えて

（公財）日本中学校体育連盟ハンドボール専門部競技部長　**齋藤 仁宏**

「豊田の大地に輝く汗を　豊田の空にひまわりのような笑顔を」のスローガンのもと、8月20日から4日間の日程で、愛知県豊田市において開催された第42回全国中学校ハンドボール大会は、中学校チャンピオンを目指す男女各20チームによって熱戦が展開されました。顧問として、学校生活はもとより健全な生活・行動にまで携わってこられた先生方の情熱と信念が、競技面のみならず挨拶や宿舎等でのしっかりとした過ごし方にも現れており、豊かな心とたくましい身体で21世紀を担う生徒の育成に貢献されていたと思われます。大会会場での横断幕の文言やゲーム中の指示の内容からも、技能の土台となる心の指導が徹底されていると感じられました。全国各ブロックの厳しい予選を勝ち抜いてきた精鋭とあって、会場での観戦や移動のマナーの面、保護者の応援の姿にも、その日頃のチーム指導の姿勢が良い影響を及ぼしていたかと思います。また、本年は例年にない猛暑日の続く中、何よりも選手の健康を第一に考え、練習の成果が発揮できるように、選手と応援が一体となることのできるようにと配慮された運営でした。実行委員会のみなさんをはじめ、地域ぐるみでの運営が随所に見られ、大会を無事に終えることができました。

さて、今大会を振り返りますと、男女ともに接戦のゲームが非常に多く、3点差以内のゲームとしては男子が6試合、女子は8試合ありました。延長までもつれた3試合はすべて最終的に1点差で、ほんのわずかな差が勝敗を決しました。上位に進出しているチームが各ブロック第1代表に限られていないことからも、それぞれのブロックでの技術・戦術の差がなくなってきていること、予選もまた熾烈な戦いであったことの現れと思われます。男子の部で7年ぶり5度目、九州ブロックに13度目の優勝を持ち帰った浦添市立神森中学校(沖縄)、女子の部で関東ブロックとしては3年連続となる、見事な初優勝を果たした川崎市立西中原中学校(神奈川)。監督・コーチのみなさん、活動をバックアップしてこられた

保護者の皆さん、温かく見守られてきた学校関係者のみなさんおめでとうございました。

現代のハンドボールでは、スピード・テクニック・スタミナの要素が問われ、大変レベルも上がってきています。リオデジャネイロオリンピックへの出場にむけて我が国ハンドボール界を上げてステップアップを目指している中、今大会の中から将来的にオリンピックや世界選手権といった国際的に活躍する選手が多数現れてくれることを祈ります。

終わりに、本大会を開催するにあたり、多大なご指導・ご支援を賜りました関係諸機関・団体役員の先生方、地元豊田市の実行委員会・中体連、生徒役員の皆様の心のこもった大会づくりと運営ぶりに深く感謝申し上げ、総評と致します。各会場においてすべての方々に大きな声で挨拶をする地元の中学生による誠意あふれる運営は、夏の暑ささえ忘れさせる爽やかさを感じさせてくれるものでした。誠に、ありがとうございました。

大会を振り返って

第42回全国中学校ハンドボール大会実行委員会事務局　石黒 英男

平成25年度全国中学校体育大会、第42回全国中学校ハンドボール大会を8月20日～23日までの4日間にわたり、愛知県豊田市において開催しました。

愛知全中の開催が決定した平成23年に、第40回京都全中の下見を急遽しました。その時に初めて全国大会を運営する立場で視察し、競技役員や生徒役員のてきぱきとした動き、地元チームの活躍などから、豊田市の競技役員組織力の強化と豊田市の中学生の競技力向上の必要性を強く感じました。第41回茨城全中の視察では、地元ぐるみの大会運営で温かさとパワーを感じました。愛知大会に向けて、地元豊田市民に、いろいろなメディアを使って発信していく必要性を感じました。

さて、本市で開催される中学生の全国大会は、2回目で、平成17年度にサッカーが豊田スタジアムを中心に開催され、開催地枠出場チームが準優勝するという快挙を成し遂げ、たいへん盛り上がった大会となりました。これに続いての8年ぶりの大会ということもあり、市民からの期待も大きく、実行委員会としてはプレッシャーを感じざるを得ませんでしたが、サッカー大会の実績と関わった方々に助けられることも多くありました。

幸いにも、会場のスカイホール豊田は、北京オリンピックアジア予選やジャパンカップを行うような日本有数の大きな体育館であり、同時4面開催が可能であったり、駐車場も多く、全館空調が整備されていたりするなど、恵まれた施設です。この会場で開催できたことは運営面で助かりました。

また、「豊田の大地に輝く汗を　豊田の空にひまわりのような笑顔を」というスローガンのもと、「子どもたちに夢を与えるような大会にしよう」「ハンドボールの盛んな愛知らしい大会にしよう」という思いから、全日本男子代表選手を10名招いて、インタビューやサイン会を実施しました。サイン会場にできた長い列や笑顔を見たとき、子どもたちに夢を与えるお手伝いができたように感じました。

今大会の生徒役員は、市内の中学校のハンドボール部設置校から参加してもらいました。また、開会式でのプラカード係りとして、女子ハンドボール部のある学校からボランティアにも参加してもらいました。

競技役員については、豊田市の実行委員だけでなく、県中体連ハンドボール競技専門部の先生方、県ハンドボール協会、地元のハンドボール少年団の保護者の方々、トヨタ自動車ハンドボール部OBの方々、そして、豊田市の中学校体育主任やボランティアの先生方にお手伝いいただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、今大会を開催するにあたりご尽力頂きました（公財）日本中体連、（公財）日本ハンドボール協会、愛知県、豊田市、東海中体連、愛知県中体連、愛知県ハンドボール協会、豊田市ハンドボール協会、（公財）豊田市体育協会そして協賛各位に改めて厚く御礼を申し上げますとともに、次年度開催である愛媛県大会の大成功と東日本大震災の被害に遭われた地域の1日も早い復興を祈念して、今大会の回顧とさせて頂きます。みなさん本当にありがとうございました。

男子優勝　浦添市立神森中学校（沖縄県）

神森中学校男子ハンドボール部顧問　瑞慶覧 長大

神森中学校男子ハンドボール部の顧問に就任すると決まった時、私は期待と不安でいっぱいでした。全国レベルの実力を持った選手たちを率いることのできる喜びと、またその一方で着実にその結果がだせるのかという不安でした。部顧問就任当初、彼らの能力には確かに目の見張るものがありましたが、チームとしてのまとまりは強いとはいえず、練習中でもハンドボールに集中できていないことがよくありました。そんな中、幸いにも有能な外部指導者が技術指導をしてくれることが決まり、私は彼らのメンタル面を強くすることと共にそこをケアしていくことに専念しました。普段のあいさつや準備・片付け、10分前行動などスポーツマンとしての当たり前の行動・資質を高めるような指導を心がけました。そ

して何より彼らのモチベーションを大事にしてきました。なかなか覇気を出せないチームではありましたが、決して暗いチームでもなかったので盛り上げに発破をかけると彼らは徐々に応えることができるようになってきました。しかし、そんな中でむかえた地区大会、県大会では意外にもよい内容とはいえないものでした。彼らは試合中に些細なミスを連発し自分たちのペースで試合運びをすることができませんでした。明らかに慢心からくる油断と緊張感の欠如でいつ負けてもおかしくない試合を続けていました。練習のミーティングで何度もそこを指摘されてはきましたが彼らの心に大きな変化はみられませんでした。そんな状況を救ったのが意外にも九州大会の決勝戦で対戦した「大分中学校さん」でした。自らの才能をも凌ぐ相手と対戦した彼らは私が見てきた中で初めての“必死”をみせました。これまでにない緊張感と危機感がそこにはありました。その経験が全国に大きな影響を与えたことは間違いありません。全国の舞台で試合を重ねるごとに彼らは成長し、チームが一つとなっていきました。

大会を振り返り、私たちが勝利を重ねていくことができたのにはたくさんの努力や援助、試練やきっかけ、そして運や巡り合わせに支えられてきたのだと感じています。そのすべてが一番うまくかみ合ったのが神森中学校だったのかもしれません。力となってくれた保護者や部活のOB、支えてくれた専門部の先生方、お互いを高めあった対戦相手、関わってくれた人はたくさんいました。この場を借りてそのすべての人たちに心より御礼申し上げます。

神森中学校男子ハンドボール部主将　平仲　航

全国大会で優勝ができてとても嬉しいです。全国制覇ができたのは、自分たちを支えてくれた保護者の方々や顧問、コーチが厳しく指導してくれたからだと思います。

試合が近づいてくると、高校生の先輩たちやJOCのメンバーが練習相手となってくれたのでとても助かりました。今まで協力してくれた方々への感謝の気持ちを全国制覇という形で表すことができて本当に良かったです。

女子優勝　川崎市立西中原中学校（神奈川県）

世代を超えた集大成

川崎市立西中原中学校　田中 秀司

はじめに、第42回全国中学生ハンドボール大会を開催するにあたりご尽力いただいた（公財）日本中学校体育連盟をはじめ、（公財）日本ハンドボール協会、愛知県ハンドボール協会、並びに関係各位の皆様に改めて心より厚く御礼申し上げます。

このたび、第42回全国中学生ハンドボール大会において初の栄冠を手にすることができました。これも日頃から、西中原中学校ハンドボール部を支えていただいている保護者の方々や、先代の長村先生をはじめ、ハンドボール部に助言・指導をしていただいた多くの方々の力があってこその結果だと心から感じています。また、春中の結果に満足することなく、常に上を目指し続けた選手たちの努力の賜物です。

全国優勝に至るまで、相手チームから常に多くのことを学び、教えていただき成長してきました。市・県大会ではチーム・選手の研究をされ、なかなか自分たちの持ち味が出し切れない試合展開も多くありました。試合が終わる度にミーティングを行い、反省と次への課題を全員で共有し前進し続けてきました。市・県大会だけでなく関東大会、全国大会でも常に学ぶ姿勢と、向上心を忘れることなく取り組んできたことも大きな要因の一つだと感じています。

３年生は、学年が変わるたびに監督が異動してしまうという条件の中で３年間ハンドボールに取り組んできました。そんな不安の中でも高い志を忘れることなく、最後まで顧問を

信じついていくという強い信念を持ち続けてくれました。そんな選手たちに心から感謝しています。また、悩みや不安を抱えている選手に対して心のケアを行い、常に前向きな気持ちにしてグラウンドへ送り出してくれた、学年主任、担任、養護教諭の先生方。そして私一人では目の行き届かないようなところまで気を使い、最後まで選手に寄り添ってくれた小山先生、桑野先生。優勝に至るまでの苦しい戦いの中でたくさんの指導•助言してくださった川崎市ハンドボール専門部、神奈川県ハンドボール専門部、関東ハンドボール関係者の皆様。そのすべての方々の協力があって、今回の春夏連覇という偉業を成し遂げることができました。今回の優勝は世代を超えた西中原中学校ハンドボール部の結晶であり、集大成であったと感じています。

今回このような素晴らしい経験をさせていただいた環境と、選手への感謝の気持ちを忘れることなく、教師として、ハンドボールの指導者としても日々精進していきたいと思います。

最後に、全国大会決勝のあの大舞台に選手たちと立たせていただいたこと。このようなチャンスをいただいたことに心から感謝申し上げます。

勝って兜の緒を締めよ

西中原中学校女子ハンドボール部　渋佐 知里

私たち西中原女子ハンドボール部は、春の全国大会を優勝という最高の結果で終わり、「勝って兜の緒を締めよ」という言葉を胸に次の全中でも全国制覇という目標を掲げ一からスタートしました。新たに１年生が加わり春の県大会を優勝しました。ですが、これからという時期を緩めてしまい他県の強豪校との練習試合では負け続け自分たちの今の実力のなさに気付かされました。そこからチームの気持ちは変わり日々練習に打ち込みました。

全中予選が始まりました。市大会を勝ち上がり県大会に出場することができました。県大会で西中原の男子は負けてしまい関東大会出場の切符を逃してしまいました。毎日一緒に練習していた男子の悔しい思いを私たちは忘れることができませんでした。そのため、男子の部員の分まで全国制覇するという気持ちが強くなりました。

迎えた関東大会。初戦から苦しい試合ばかりでしたが、チーム一丸となって戦い決勝進出を決めました。決勝の相手は昨年の全国の王者•けやき台中学校。前半は苦戦しましたが、自分たちの良さであるコミュニケーションをとり徐々に自分たちのペースを取り戻し、関東大会を制覇しました。

そして全国大会。私たちは２回戦から出場でしたが、初戦の相手ということもあり足が動いていなく固くなったものの段々と持前の速攻を生かし培良中学校を、３回戦は高岡中学校を、準決勝は大住中学校に勝利しました。決勝戦の前のチームで気を引き締めました。決勝の相手は春と同じ平田中学校でした。試合は春と同様に序盤から激しい試合となり互角の戦いを繰り広げ、前半は９対６でリードして終えました。ハーフタイムではみんなで攻めて勝つと話し、絶対に負けないという気持ちを強く持ちました。後半も相手の素早いプレーに苦戦したものの自慢のディフェンスから速攻を中心に得点を重ねていき、退場者も出してしまいましたが、周りの選手が支え合い苦戦を乗り越え、その結果 18 対 16 で勝利し念願の春夏連覇を達成することができました。

私たち３年生は毎年指導してくださる先生が違いました。１年生の時は松永先生からプレーの基礎や日々の生活態度。２年生の時は大房先生から全国大会での勝ち方や人間性の大切さ。そして３年生になり田中先生からは、「試合中に一人でも泣くやつがいれば泣ける」と言われ続け、そこから連続優勝するための本当の強さを教えてもらいました。つらいときにチームを盛り上げてくださった小山先生、桑野先生。遠征の度に引率してくださった尾立先生。つらいことや苦しいこともありましたが、それぞれの先生方が教えてくださったことで私たちは大きく成長することができたと思います。そんな先生方のおかげで春夏連覇することができました。

また、校長先生をはじめ教頭先生や先生方、西中原中生徒の皆さん。地域の皆さん。いろいろなところでお世話になった先輩方。ハンドボールで知り合った全国のライバルたちの応援。そして決して忘れてはいけない家族、チームメイトの支えがあったからこその全国優勝だと思います。

そんな方々への感謝の気持ちを忘れずにこれからもがんばっていきたいと思います。

戦　評

▶男子◀

■準決勝

神森中学校　27（17－11、10－13）24　岐陽中学校

神森中のスローオフで試合開始。先制点は神森中２番平仲のランニングシュートがきまる。すぐさま岐陽中６番長弘がディフェンスのマークを外し、シュートを決め取り返す。そこからゲームの流れをつかんだのは神森中。フットワークを生かしたアタックディフェンスに岐陽中が攻め手を欠き、神森中がカットからの速攻など、４連続得点。前半８分、岐陽中２対６でタイムアウト。その後も神森中３番豊里の豪快なミドルシュート、11番池原の速攻を中心としてペースを渡さない。前半20分、15対６で神森中９点リード。ここから岐陽中が力を発揮する。２番坂根のフェイントをきっかけとしディフェンスをくずし一挙に５得点で差を詰める。前半は17対11。神森中６点リードで終了した。

後半開始、神森中のディフェンスに対応を見せ、岐陽中が得点を重ねペースをつかむ。岐陽中２番坂根を中心とした攻撃で徐々に点差を詰めていく。岐陽中のディフェンスも神森中３番豊里にシュートを打たせない堅い守りを見せ、後半20分、23対21の２点差までつめよる。神森中は退場者も出て苦しい状況の中、11番池原がサイドシュートを連続で決め、勝負あり。両チームともゴールキーパーのファインセーブも多く感動する試合であった。

西条中学校　23（7－7、16－8）15　滝ノ水中学校

先制点は西条中14番平井がパスカットから速攻を決めた。西条中は滝ノ水中の二次速攻に対し、中盤でアグレッシブにプレッシャーをかけミスを誘う。滝ノ水中も堅い守りで粘り、序盤はロースコアの展開となった。９分、西条中GK中島がノーマークシュートをファインセーブし、そのまま３番安平が速攻を決めた。続けて２番安達が２連取し、４対１と西条中が３点リードした。13分過ぎ、滝ノ水中がタイムアウト。その後14番不破のロングシュートが決まり２点差とするが、その直後、滝ノ水中に退場者が出る。しかし、滝ノ水中は苦しい状況の中、GK服部のファインセーブで点を与えない。その後も我慢強く守り、じわりじわり点差を詰めていき、23分過ぎに同点に追いつき前半は７対７で終了した。

後半開始直後、西条中は２番安達、14番平井の速攻で２連取するが、滝ノ水中も13番志水のポストシュートや14番不破のロングシュートで対抗する。しかし、７分過ぎから西条中は13番太田のステップシュートやカットインシュート、２番安達の速攻などで４連取し、14対10と４点をリードする。滝ノ水中もたまらずタイムアウト。その直後、11番谷本がロングシュートを決めるものの、西条中15番林のロングシュートで取り返す。西条中は後半の中盤以降もディフェンス面でよく足が動き、積極的に相手にプレッシャーをかけ、速攻で点差を広げ、８点差でタイムアップとなった。

■決勝

神森中学校　26（13－10、13－12）22　西条中学校

３回戦で春中の覇者、大分中を破り、続く準決勝では滝ノ水中を下して愛知県の全中５連覇を阻止して勢いに乗る富山の西条中が、相手チームを苦しめ続けてきた沖縄の神森中の堅固な高めの３－３ディフェンスをどう崩すのかが楽しみな決勝戦。

両GKの好セーブで試合が始まる。先制は神森中２番平仲のパスカットから速攻。対する西条中は15番林が鋭いロングシュートをきめる。この後神森中は積極ディフェンスでミスを誘い、11番池原の速攻などで３連取。西条中が３点差を迫って一進一退の攻防に入る。12分、西条中は13番太田の得点を皮切りに３連取。16分には15番林がディフェンスに当たられながらもシュートを押し込み、このゲーム初めてリードする。ここでタイムアウトを取った神森中は、GKの12番奥原がファインセーブを連発。それにこたえるように、９番新垣のロングシュートなどで５得点し、３点差をつけて13対10。神森中リードで前半を折り返した。

後半も神森中ディフェンスの激しいプレッシャーは続き、２番平仲がパスカットから速攻を決めペースをつかむと、７分までに点差を６点に広げる。西条中は13番太田、15番林が力強いドリブルでディフェンスをかわし、豪快なシュートを決め、得点を重ねる。一時は３点差まで詰め寄る。しかし、神森中は２番平仲、４番仲石のロングシュート、11番池原のカットインが要所で決まり、西条中の追撃を許さず、26対22で平成18年度以来の優勝を飾った。

▶女子◀

■準決勝

西中原中学校　23（10－9、13－7）16　大住中学校

前半大住中のスローオフで試合開始。先制点は西中原中、速攻から２番山田のフェイントシュートが決まる。その後も３番中村のカットインなどで５分には、３対０とリードを広げる。早く得点が欲しい大住中だったが、西中原中１番渋佐の好セーブもあり、ノーマークシュートのチャンスを得るものの、得点にはつなげられない。粘り強く攻め続けた大住中の初得点は、３番伊藤のカットインシュートだった。この得点から勢いをつける。ロングシュートには当たっている渋佐に対して、大住中はポストを効果的に使い始める。４番石川のサイドシュートを皮切りに、６番菊池のポストシュートが連続で決まり、12分過ぎに試合を振り出しに戻す。ここで西中原中もタイムアウトを取り、立て直しにかかるが、足をしっかり合わせて守る大住中DFを崩しきれない。流れに乗った大住中は７番吉川の連続得点もあり、中盤には８対５とリードする。西中原中学校もこのままでは終わらせない。落ち着きを取り戻し、思い切りの良い速攻から、怒とうの反撃を見せる。４番佐保のステップシュートや５番羽二生のサイドシュートなどで、５連取し前半終了直前に逆転する。前半は互いに譲らず10対９と１点差で西中原中がリードして折り返した。

後半、前半終わりの勢いそのままに西中原中が猛攻を見せる。7番志村のサイドシュートから勢いに乗った速攻を見せ立て続けに得点を決め、8分には16対10と6点差をつける。大住中はタイムアウトを取り、立て直しにかかる。中盤、西中原中は退場者を出すも、このピンチを1番渋佐を中心にしのぐ。大住中も3番伊藤、2番南の身長を活かした攻撃で反撃するものの西中原中の粘り強く足を使ったDFに苦戦し、23対16でタイムアップとなった。

平田中学校　16（11－3、5－10）13　平針中学校

平田中のスローオフでゲームがスタート。先制点は平針中8番平澤のサイドシュートが決まる。すぐさま、平田中は8番横田がパスフェイントからゴールを決め、追いつく。そこから6番吉田、4番山本のミドルシュートが連続して決まり、平田中ペースで試合が始まる。平針中は、足が動いている平田中ディフェンスに対して攻めあぐね、逆に2番上尾、5番柿本がリズムの良いパス回しの中から得点を決め、7対2としたところで平針中はタイムアウト。その後、平針中もパスのリズムを上げ、フリーシュートの場面を作るが、平田中GK中妻が立ちはだかる。平田中は6番吉田の連続得点を含む4連取で11対3とし最高の形で前半戦を終えた。

後半は、得点が欲しい平針中は相手のセットプレーに対応し始め、そこからの速攻の勝負をかける。5番向井、4番木元のシュートが決まり、さらに3番鈴木のミドルシュートが連続してゴールにつながるなど、10分間で13対9まで追い上げる。ここで平田中はタイムアウト。しかし平針中の勢いは止まらない。3番鈴木がさらに連続ゴールを決め3点差に。前半に比べ、単発のロングシュートが目立ち始めた平田中は、平針中の動きが速くなったディフェンスに攻め手を欠き、パッシヴプレーを予告され、苦し紛れのロングシュートを連発する展開に。タイムアウト後、平田中9番亀谷が相手の退場を誘いながらの倒れこみシュートを決め、点差を広げ、流れを引き戻した。このまま平田中が逃げ切り、全中の決勝へと駒を進めたのだった。

■決勝

西中原中学校　18（9－6、9－10）16　平田中学校

試合開始1分、平田中が6番吉田のゴールで先制点を挙げる。しかし、すぐさま西中原中2番山田の強烈なミドルシュートで取り返す。序盤から両チーム激しいディフェンスを見せ、相手オフェンスにディフェンスの間を割らせない。ディフェンスのすきを突き、西中原中6番森がゴールをあげるが、平田中も4番山本の鋭いカットインを決め、開始20分、5対5の同点。互角の戦いを繰り広げる。20分過ぎ、4番佐保の強気な攻めが相手の退場を誘い、そのプレーで得た7mTを3番中村が確実に決める。その後も、5番羽二生、4番佐保が連続で得点を挙げ、西中原中学校がわずかに抜け出す。平田中も前半終了間際に、6番吉田がロングシュートをたたきこみ追い上げを見せたところで前半終了。9対6、西中原中リードで後半戦へ。

後半開始直後から西中原中が足の良く動いたディフェンスからの速攻を中心に、6分過ぎまでに4連打。一気に突き放しにかかる。離されまいと6番吉田が連続ロングシュートを決めると、5番羽二生も右サイドからとびこみ得点を挙げる。両チームディフェンスに疲れが見え始めたところで平田中が、ディフェンスの間を強気に攻め7mTを獲得。しかし、西中原中1番渋佐がファインセーブ。チームのピンチを救う。残り4分、相手のミスを突き、平田中2番上尾が速攻で得点を挙げ2点差に迫る。しかし、西中原中は、落ち着いた攻めから7番志村がポストシュートを決め、続けて、2番山田がスピードに乗った速攻から勝負を決めるゴール。18対16、西中原中が栄冠を勝ち取った。

日本代表にインタビュー（全国中学校大会から）

全国中学校大会、男子決勝のハーフタイムを利用して、大同特殊鋼、トヨタ車体所属の日本代表選手に地元中学生からインタビューが行われた。

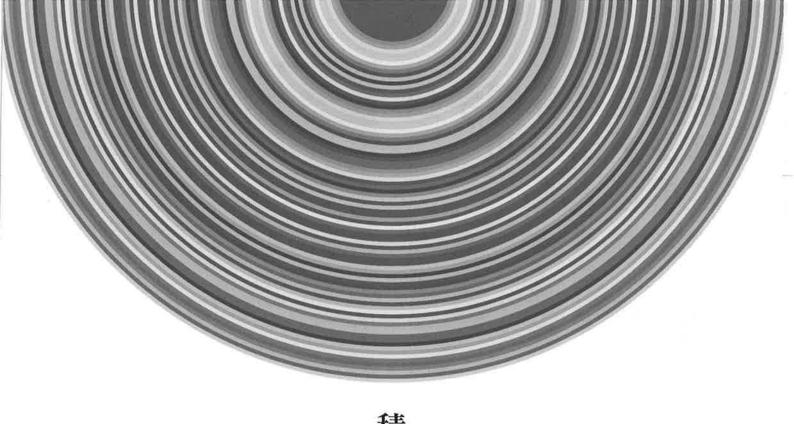
最初は、現男子ナショナルチーム清水監督から。試合を見ての感想を求められ、素晴らしいプレーが多くみられたことと、将来ナショナルチームで活躍できるよう精進してほしいと、エールが送られた。

男子ナショナルチームキャプテンの武田選手からは、「皆さんもしっかり勉強して、文武両道に優れた選手に成長してほしい」とのエールが送られた。

どうしたらハンドボールが上手くなるかという質問もされましたが、多くの選手が練習が大切と述べていました。やはり、優秀な選手になるためには練習が一番大切なようです。

表彰式のメダルプレゼンターには、協会等役員の方々が担当されていましたが、ここでは、現役ナショナル選手の武田選手と、高智選手が担当しました。（写真は高智選手）メダルを受けた中学生にとっては憧れの選手だけに、感動もひとしおのように見受けられました。

全国中学校大会が開催された、豊田スカイホールは、オリンピック予選や全日本マスターズ大会など多くの大会が開催

されたところです。今回も数年前から準備を重ね、成功裏に大会を終えました。特に地元枠で出場した、豊田市立前林中学校と高岡中学校は共に初戦を突破し、大いに大会を盛り上げました。豊田市ハンドボール協会平松学会長は、大会を成功裏に終えることが出来、今後ますますハンドボールの発展に寄与して行きたいとの抱負を述べられていました。

第40回 全国高等専門学校ハンドボール選手権大会

©allsports.jp

©allsports.jp

大会を振り返り

大会主管校（八戸高専ハンドボール部顧問）森　大祐

第48回全国高等専門学校体育大会・第40回全国高等専門学校ハンドボール選手権大会が8月17～18日、青森県の十和田市総合体育センターにて開催されました。7月に開催された各地区高専大会を含む全国高専大会は、高専1～5年の全学年で構成したチームで挑むことができる唯一の公式競技会であり、高専生にとっての最大の活動目標であると言えます。今年度は全国8地区の予選を勝ち抜いてきた函館、一関、仙台（名取キャンパス）、東京、豊田、石川、大阪府大、徳山、高知、北九州、有明の11校に主管校の八戸を加えた12チームで行われました。大会に先立ち8月16日に行われた開会式で、主管校八戸高専の主将である浜野航貴君が力強い選手宣誓をして熱戦の火蓋が切られました。日程は3チームずつ4ブロックに分かれ競われる予選リーグ（8月17日）と、各ブロック1位の4チームによる決勝トーナメント（8月18日）です。

大会開催の準備にあたっては、青森県で全国高専ハンドボール選手権大会が開催されるのは平成6年の第21回大会以来でありました。そのため……

【優勝】徳山高専

技において、3連覇した時のみ高専機構から特別表彰というものがあり、この3連覇というものは本当に重い結果なのだなということが今回の大会を通してよくわかりました。

最後に、本大会を円滑に運営していただきました八戸高専の皆様と、審判の派遣など競技に多大なるご協力をいただきました青森県ハンドボール協会、十和田市ハンドボール協会の皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。

徳山高専監督　池田 光優

「3連覇への重圧」、今大会は私にとっても、部員達にとっても、この言葉に強く縛られた大会でした。昨年度の高専大会から変わったメンバーは一人だけであり、周りの目は「徳山高専が3連覇するだろう」と見られていましたが、実際は進路の関係や怪我などで全国大会直前までメンバーが固定しきれないという非常に危ない状態でした。会場に入ってからも私を始め徳山高専全体に固さがありました。実際に試合がすすんでいくとその固さもとれましたが、今年度の決勝戦の相手である函館高専は最強の相手であり、一進一退の攻防が最後まで続く非常に緊迫した大会となりました。今回は本当に両校どちらが優勝しても不思議ではない内容でした。そんな中で、選手達は最後まで勝つことをあきらめなかったので、今回このような結果が得られたのだと思います。今回の3連覇に対し、常に主力選手として活躍した5年生のみなさん、本当におめでとうございます。高専体育大会には団体競

徳山高専主将　國廣　創

昨年の高専大会は現在の5年生中心のチームで優勝し、今大会も同じメンバーで望む予定でしたが、怪我や進路の関係で調整がつかず、4年生以下の選手の成長が必要となりました。そこで、メンバー全員が試合に出て戦えるチームを目標にこの1年間活動し、無事中国大会を勝ち進むことができました。そして全国大会、3連覇の重圧からか調子は上がらず、特に決勝の函館高専戦は厳しい展開でしたが、なんとか優勝することができました。笑顔で引退させてくれた楽しい後輩達、そして今まで徳山高専を引っ張ってきてくれた5年生のみんなには本当に感謝しています。

応援、サポートしてくださった方々には感謝を申し上げます。これからも徳山高専ハンドボール部をよろしくお願いいたします。

会以来の19年ぶりで、本校で当時のことを知る者も少なくどのように進めればいいのか戸惑うところもありました。そのような中、青森県ハンドボール協会および十和田市ハンドボール協会のみなさまには多大なご支援で開催に導いていただき、大変お世話になりました。大会当日は、ご存知の通り列島を猛暑が襲っており、本州最北端の青森といえども平年の気温を大きく上回る異例の酷暑の中での競技となりました。冷房設備の無い会場のため熱中症が心配されましたが、大きな事故無く大会を終えることができたことは、大会運営に携わる者として一番安堵したことでした。選手の体調とベストパフォーマンスを第一に配慮して大会を支えていただきました皆様、また、大会に臨んでいただきました各チーム関係者の皆様には感謝申し上げます。

今大会は三連覇を狙う徳山高専に注目が集まりましたが、選手達は連日の猛暑にも負けず予選リーグから白熱した試合を繰り広げました。予選リーグ第1ブロックは、大阪府大高専が昨年度も同じブロックでしのぎを削った高知高専に競り勝ち昨年度準優勝の実力を発揮し2年連続の決勝トーナメントへ。第2ブロックは函館高専と北九州高専が競り合った結果、函館高専が3年連続の決勝トーナメント進出を決めました。第3ブロックは、平成6年に同会場で開かれた第21回全国高専大会以来の優勝を狙う石川高専が地元開催で初の決勝トーナメント進出を狙う八戸高専を振り切り決勝トーナメント進出を果たしました。第4ブロックは三連覇がかかる徳山高専が盤石の危なげない試合展開で予選を突破しました。

昨年度と同じ顔合わせとなった大阪府大高専vs函館高専の準決勝第1試合は、函館高専が昨年度の雪辱を果たし決勝戦の切符を手にしました。準決勝第2試合は石川高専vs徳山高専。徳山高専が前半懸命に食らいついた石川高専を後半に振り切り三連覇をかけた決勝戦へ勝ち進みました。決勝戦はともに3年連続で決勝トーナメントに駒を進めてきている函館高専vs徳山高専。終始追いつ追われつの展開で最後のブザーが鳴るまで勝敗の行方が分からない手に汗握る試合を披露しました。結果は徳山高専が三連覇の快挙を達成し全国高専ハンドボール選手権大会に新たな歴史を刻んで2日間の幕を閉じました。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりご支援ご協力いただきました日本ハンドボール協会、青森県ハンドボール協会、十和田市ハンドボール協会、地元三本木高校ハンドボール部をはじめとした全ての役員・スタッフ・関係の皆様にお礼申し上げ、大会の報告とさせて頂きます。

戦　評

■準決勝

函館高専　23（12－4、11－12）16　大阪府大高専

昨年度は同じ対戦カードで大阪府大が勝利を収めている。前半、キーパーの好守などもあり昨年度全国大会を経験した選手が多く残る函館のペースで試合が進む。大阪府大は開始2分の7mスローによる1点目以降得点することができず8分にタイムアウトを取るも流れを変えられず、2点目は終盤19分まで待つこととなる。結果4対12で函館が8点のリードで前半を折り返した。

後半序盤も函館のペースで試合が進む。11分までに6対17と点差をさらに広げた。ここでタイムアウトを取った大阪府大は残りの時間を3年生の西尾と片山で7得点を挙げるなど、ようやくペースをつかむが、前半で付けられた8点差は大きく、23対16で函館が決勝進出を決めた。

徳山高専　25（10－8、15－8）16　石川高専

立ち上がり、徳山は先制点を許すもその後4連続得点を挙げる。しかし、直後に石川も3連続で得点を重ね食らいつく。その後中盤は両者譲らない展開を見せるが、15分過ぎ徳山が再度立て続けに3連続得点を挙げ、19分の時点で7対10とする。流れを変えて前半終了までに追いついておきたい石川は残り5分でタイムアウトを取り、その後得点を許すことはなかったが、1点を返すに留まり徳山の2点リードで前半が終了。

後半も徳山がさらに主導権を強めることとなった。固く守っては、2番池岡と14番濱崎を中心にした決定力ある攻撃で着実に得点を重ねリードを広げた。一方、石川は必死に追い上げを試みるも、終始徳山のペースで試合を展開された。最後は9点差で徳山が勝利した。

■決勝

徳山高専　22（10－8、12－13）21　函館高専

前半は4分の函館の先制点から始まり終盤までシーソーゲームの展開であった。15分に徳山が立て続けの2連続得点でペースを掴むと思われるも、函館も良く粘り引き離されない。23分を過ぎ8対8の同点。残り時間、後半に向け優位に進めておきたい両者だが、決定力を示したのは徳山だった。2点連取で8対10で折り返す。

後半は両者の激しい攻防となる。試合が動き始めたのは8分過ぎ。徳山に退場者が出たのを皮切りに函館が3連続得点で先取点以降初めてリードしペースを掴み始める。その後、函館は7番茂木がチームの得点を4連続で決めるなど、20対18で残り5分を迎える。徳山は21分に退場者を出し劣勢になるも得点を許さず持ちこたえる。残り1分で21対20、函館の1点リード。函館は試合を決定付けようと1点を狙うが守られそのまま得点を許し同点。再度最後の得点を狙うもカットされ残り10秒で14番濱崎が決め、徳山が激戦を制し三連覇を達成した。

【最終順位】
優　勝：徳山高専
準優勝：函館高専
3　位：大阪府大高専・石川高専

第15回 全日本ビーチハンドボール選手権大会

最終順位			
[男子]	優勝：東海 Weeds!（愛知）	準優勝：HC 大阪（大阪）	3位：ボンチフェローズ（大阪）
[女子]	優勝：日本体育大学（東京）	準優勝：SHINE（茨城）	3位：風見鶏クラブ（兵庫）

第15回全日本ビーチハンドボール選手権大会を振り返って

日本ハンドボール協会ビーチハンドボール委員会委員長　大原 康昇

去る、8月24日（土）・25日（日）に兵庫県・神戸市アジュール舞子で第15回全日本ビーチハンドボール選手権大会が開催されました。関西地区の発展の拠点としてここ数年神戸で大会を開催しています。今年は過去にない猛暑日続きで22日の会場設営は本当に大変でしたが、大会が始まるや、初日は雨天となり、2日目は大雨洪水警報、雷注意報が出たりしました。中止や順延する訳にもいかず、細心の注意を心がけ大会を実施しました。それには、都市部の海水公園ということもあり、警察官、消防署員の巡回、10数名のライフセーバーの皆様のご協力があり、なんとか大会開催をすることができました。このような悪天候の中、各チームの選手諸君は熱き戦いを展開してくれました。

男子の部、初優勝の東海 Weeds!、女子の部、3連覇の日本体育大学に心から賛辞を送ると共に、悪いコンディションの中で健闘された各チーム選手諸君に敬意を表します。

また、国内の普及についても、沖縄6月16日（日）をかわきりに、愛知6月22・23日（土・日）、青森7月末日、千葉8月3・4日（土・日）、宮崎9月15・16日（日・月）と大会が開催されています。是非、一度は経験していただきたいと願う次第です。チームは8名編成ですが、5、6名でも十分に試合はできます。特に、若年層においては砂上であり、トレーニングの一環として参加していただけばと思います。

国内のビーチスポーツ施設はまだまだ整備されていませんが、各都道府県の協会役員の皆様方のご協力とご理解を得てビーチハンドを発展させ、ハンドボールの愛好者を増やせればと願っております。

最後に、大会開催にあたり、ご指導、ご協力いただいた日本協会を始め、兵庫県、神戸市の各団体、大会を応援していただいた神戸新聞、アシックス、モルテン等の各企業に心からお礼を申し上げます。また、大会を陰から盛り上げていただいた大会役員関係の皆様、本当にありがとうございました。

[男子優勝]　東海 Weeds!（愛知）

東海 Weeds!　沖本哲郎

はじめに、第15回全日本ビーチハンドボール選手権大会の開催にあたり、荒天の中、運営をしていただいた日本ハンドボール協会ビーチハンドボール委員会及び兵庫県ハンドボール協会の関係各位、運営補助員として協力していただきました高校生の皆様方に心より感謝申し上げます。

1998年に関東地区を中心に活動するハンドボールサークル Weeds! が発足し、2004年から2005年に私が所属させていただきました。仕事の都合でチームを離れる際に愛知県でもチームを立ち上げてみてはどうかとの声に応え、2006年に東海 Weeds! を発足しました。ポスターを貼ったり、ホームページを開設したりしてメンバーを募り、ゼロからチームを立ち上げるにはかなり苦労しましたが、ハンドボール好きが集まるチームができあがりました。現在では、愛知県のみならず岐阜県からも参加し、各種インドアの大会を楽しんでおります。

ビーチハンドボールとの出会いは、関東の Weeds! に所属していた時に富浦の大会へ参加したことがきっかけで、東海 Weeds! のメンバーに紹介したところ多くのメンバーが興味を持ち5年前から富浦の大会へ出場し、全日本ビーチハンドボール選手権大会へも第12回から4年連続で出場しております。

昨年は、決勝でショットアウトの末 HC 大阪に敗れてしまったので、打倒 HC 大阪を目標に今大会に挑みました。悪天候でボールコンディションが悪い中、予選リーグ、準決勝、決勝全てショットアウトまでもつれ込み、シューターがシュートを決めきれない中、キーパー河崎の好セーブが続き、何とか初優勝を掴むことができました。

もっともっとビーチハンドボールを普及させる為、角先生、大原先生のご指導の下、一昨年から愛知県で東海ビーチハンドボールフェスタを開催しております。なかなか出場チーム数が集まらないのが現状ですが、今後は開催地の南知多町と協力して、大会規模の拡大、ビーチハンドボールの普及を目指していきたいです。

最後になりましたが、今大会の為にご尽力いただきました関係者の皆様、本当にありがとうございました。

[女子優勝]　日本体育大学（東京）

日本体育大学　青山 紗弓

はじめに、第15回全日本ビーチハンドボール選手権大会の開催にあたり、多大なるご支援、ご協力を戴きました兵庫県ハンドボール協会、日本ハンドボール協会、ビーチハンドボール委員会の方々をはじめ、関係者の方々に心より感謝申し上げます。

日本体育大学は近年、ビーチハンドボールの普及発展、研究、競技力向上の観点からビーチの大会に参加させて戴いております。今大会、日体大は私以外の全員がビーチハンドボール初心者というメンバーで出場しました。今大会は三連覇がかかった大会であった為、「必ず優勝しなければならない」というプレッシャーがありましたが、大会前の練習を通して全員が自信を持ち試合に臨む事が出来ました。その結果、一人ひとりが積極的にプレーをする事ができ、優勝へと繋がったと思います。

これまでの経験から、確実なピルエットシュートが打てないチームは、ショットアウトになると勝てる可能性が低くなる為、確実に1点を積み重ねていくということを徹底しました。しかし、1点シュートのみで勝つのは厳しい為、スカイプレーを使う事で、ピルエットシュートを決めてくるチームに対しても互角に戦う事が出来ました。その結果、1度もショットアウトを行う事なく勝つ事が出来ました。相手にリードされた時も「焦らない。楽しむ。」ということを全員が意識し、落ち着いて自分達のプレーをする事が出来ました。

今大会に参加して、それぞれが自分と向き合い成長出来たと思います。ビーチハンドボールを通して感じたこと、学んだことを今後の7人制ハンドボールやビーチハンドボールに活かしていきたいと思います。

ビーチハンドボールならではの楽しさや面白さを更に多くの人に知ってもらい、ビーチハンドボールが益々発展していくことを心より願っています。様々な形で支えて戴いた皆様、ありがとうございました。

戦評

【男子】

▼準決勝

東海Weeds!　2（11－8、8－9、5－2）1　ボンチフェローズ

第1ピリオド、ボンチフェローズNo.3徳永のピルエットシュート2点でリードした。さらにNo.4金のピルエットが決まり点差を広げた。しかし東海Weeds!はNo.3中野GKの連続シュートで点差を詰め寄り逆転勝利する。第2ピリオド、東海は確実に得点を重ねリードしたが、ボンチNo.3徳永のピルエットシュートとNo.5岩崎のポストシュートにより逆転しボンチフェローズが勝利、ショットアウトは東海Weeds! No.3中野のピルエットシュートが決まり勝利した。（氷海）

HC大阪　2（11－10、10－6）0　HC同志社

第1ピリオド順調な立ち上がりを見せたHC同志社は7－4と引き離したが、終了間際No.3金のコートキーパーシュート、No.10大野のピルエットシュート等で追いつき、終了直前No.10大野のゴールデンシュートでHC大阪が勝利した。第2ピリオドは両チーム一進一退の攻防であったが、6分過ぎ、No.3金の4連続得点で8点を入れ引き離し、HC大阪が勝利した。（後藤）

▼決勝

東海Weeds!　2（14－12、10－11、4－2）1　HC大阪

第1ピリオド、HC大阪No.10大野のピルエットでリードし、その後No.3金のGKシュートで差を広げた。しかし、東海Weeds! No.1伊藤、No.9下野、No.4中野のピルエットシュートが決まり逆転勝利した。第2ピリオド東海Weeds! No.中野GKシュートに続き、6mスローでリードしてスタートした。HC大阪はNo.3金のGKシュートを決め追いつきゴールデンゴールとなり、HC大阪が勝利した。ショットアウトは4－2で東海Weeds!が勝ち優勝した。（氷海）

【女子】

▼準決勝

日本体育大学　2（10－6、11－6）0　あぶらおおめ

第1ピリオド日体大は確実に1得点シュートでリードをした。そして日体大No.2青山のGK得点により更に差を広げた。あぶらおおめはNo.11平岡が6mスローで差を詰めたが、日体大が10－6で勝利した。第2ピリオドはあぶらおおめNo.5藤平のサイドシュートでリードしたが、すぐに日体大No.3加陽のスカイプレー2点で逆転した。そして、No.2青山GKシュートでリードし勝利した。（氷海）

SHINE　2（9－2、8－5）0　風見鶏クラブ

第1ピリオド立ち上がりSHINE　No.9木下のピルエットシュート、No.6中谷の連続得点、GK2点シュートを順調に決め、得点を上げ9－2で勝利した。第2ピリオドに入っても攻撃の手を緩めず、決勝へと駒を進めた。風見鶏も得点のチャンスはあったが、ノーマークシュートを連続で外し追い上げられるチャンスをものにできなかった。（後藤）

▼決勝

日本体育大学　2（15－2、8－6）0　SHINE

第1ピリオド立ち上がり攻撃のリズムをつかみきれないSHINEに対し、日体大No.6桐生のコートキーパー得点、No.3加陽のピルエットシュート、No.2青山のコートキーパーシュート等で着々と加点し、14－2で勝利する。第2ピリオドに入り攻撃のリズムを取り戻したSHINEはNo.4丸田の連続6mスロー得点で6－7に追いすがったが、地力に勝る日体大が8－6と逃げ切り優勝した。（後藤）

第21回 日・韓・中ジュニア交流競技会

男子		韓国	日本	濰坊	中国	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
1位	韓国		40○30	36○29	41○15	3	3-0-0	117	74	43	6
3位	日本	30●40		41○28	38●41	3	1-0-2	109	109	0	2
4位	濰坊	29●36	28●41		27●34	3	0-0-3	84	111	-27	0
2位	中国	15●41	41○38	34○27		3	2-0-1	90	106	-16	4

女子		韓国	日本	濰坊	中国	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
1位	韓国		24○22	29○15	34○24	3	3-0-0	87	61	26	6
2位	日本	22●24		40○16	26△26	3	1-1-1	88	66	22	3
4位	濰坊	15●29	16●40		16●38	3	0-0-3	47	107	-60	0
3位	中国	24●34	26△26	38○16		3	1-1-1	88	76	12	3

2，3位の順位は、両チームの得失点差により決定

第21回日・韓・中ジュニア交流競技会参加報告

総監督　船木 浩久
（全国高体連専門部委員長）

本競技会は、1993年日本の福島県で第1回大会が開催され、今回で21回目となりました。今回は中国・山東省濰坊市（ウェイファン）において8月23日（金）から29日（木）まで開催されました。日本選手団は11競技に244名、ハンドボール競技からは全国から選抜した選手28名、全国高体連専門部から役員5名の33名が参加しました。

8月22日（木）は関西エアポートワシントンホテルに夕方集合し宿泊しました。23日（金）は関西国際空港から青島流亭国際空港へ空港から宿泊先の濰坊市にあるThe Farrington Hotelまでバス移動約2.5時間は、変わらぬ景色（延々と続くトウモロコシ畑）は中国の広大さを改めて感じました。24日（土）は午前中練習、午後、ホテル会議室にて監督審判会議が行われ、翌日からの試合方法・ユニフォーム等の確認をしました。夜、富華国際会議中心で開会式、各国団長の挨拶、各国選手代表による宣誓がありました。オープニングの雑伎団による歌や太鼓の演奏と演武は素晴らしいものでした。

8月25日（日）からの試合は、昌邑市文山中学校体育館を会場に日本・韓国・中国に開催地濰坊市代表チームを加え4チームの総当たりで行われました。男女とも一日目の韓国に敗れましたが、二日目の開催地濰坊市代表には勝利しました。しかし、三日目の中国に女子は引き分け、男子は敗れてしまいました。対戦成績女子は1勝1分1敗で2位、男子は1勝2敗で3位と残念な結果に終わりました。なお、試合結果については、監督・選手から別途報告があるので省略します。

27日（火）は、競技終了後、富華国際会議中心でフレンドシップ交流会が開催されました。男女のグループが歌とダンスのパフォーマンスを披露し、会場は興奮の坩堝となりました。また、各国から2チーム、計6チーム（日本からはラグビーフットボールチームと陸上競技チーム）が出し物（歌やダンス）を披露し、交流会を盛り上げました。なお、今年のハンドボールチームは少々おとなしい感じでした。28日（水）は世界最大規模の恐竜博物館を2カ所見学し、スケールの大きさを感じました。終了後は繁華街等でそれぞれの時間を過ごしていたようです。29日（木）朝、The Farrington Hotelを出発し、夕方帰国しました。

今回、日本代表として参加した選手達は、男子、阿部富夫監督・酒井信幸コーチ、女子、北中弘規監督・中山学コーチ指導のもと、如何に戦う集団になれるか、限られた短い時間の中で戦術や個人の役割等を確認しました。同じ目標に向かって練習することによって、日を追うごとにまとまりのある集団になりました。成績は残念な結果となりましたが、日本代表として恥ずかしくない戦いをしてくれたと思っています。ただ、韓国の技術の高さ、体幹の強さは見習う必要があり、中国の大型化にも対応していかなければなりません。来年は、日本開催（岩手県）であり、それなりの結果を残せるように今後取り組んでいきます。選手は、この貴重な国際大会の経験を活かし、次の舞台で活躍してくれることを期待しています。

大会の参加に際しては、4月に大阪で選考会、8月20日から2泊3日で男子は桃山学院大学、女子は大阪教育大学と大阪体育大学でそれぞれ直前合宿を行い、多くの方々から多大なるご支援とご協力を賜りました、心から感謝を申し上げます。今後とも、全国高体連活動へのご理解とご支援をお願いしまして大会参加報告と致します。

第21回日・韓・中ジュニア交流競技会を振り返って

男子チーム監督　阿部富夫
（茨城県立鉾田農業高等学校）

選手選考会は、4月20日（土）～21日（日）大阪府堺市家原大池体育館において、男子45名が参加して行われました。体力測定、ゲーム、面接を通して、各ポジションの専門的技術、速さと俊敏さ、ハンドボールへの取り組む姿勢等を考慮し、代表選手14名を選考しました。

日・韓・中ジュニア交流競技会へ向けての直前合宿を、8月20日（火）～22日（木）桃山学院大学で行いました。まず、日本代表としての心構え、直前合宿を行う意義を指導し、個人・チームの課題を明確にしました。桃山学院大学との合同練習、練習試合を重ね、短期間で想定した課題の解決に繋がりました。

◆8月25日（日）対韓国戦

立ち上がり韓国の速い攻撃に対応できずシュートを打たれるが、GK三宮の好セーブにより持ちこたえ、村田のサイドで先制する。その後は、守ってはいるが攻撃に精彩を欠き、なかな

か得点できない中､7分までに5点連取される。津山のロング、木村・村田のサイドで12分には5対7と2点差に迫る。韓国のバックプレーヤーの鋭いフェイント、カットインに乱され17分には、7対12と突き放される。そこから粘りを見せ、石田の速攻、堀のロング、木村・村田のサイドと22分には12対13と1点差まで詰め寄る。しかし、イージーミスから連続得点を許し、28分には13対19とされる。ラスト2分で木村のサイド、津山のロングで得点するが、15対20の5点差で前半を終える。後半も、韓国バックプレーヤーの強力な動きを止められず、早々に3点連取される。更に6分までに3点連取され､17対26と完全に主導権を握られる。堀･津山のロング、石田・吉田の速攻で巻き返しをはかるが、点差を縮めることができず30対40で終える。

【得点】津山6、石田4、村田4、木村4、堀4、吉田3、香川1、重岡1、木下1、竹内1、昆1

◆8月26日（月）対濰坊戦

開始早々、吉田のサイドにより先取点を上げる。その後、濰坊の荒い守りやサイドシュートに対するファウルが判定されず、ちぐはぐな攻めが続き得点に繋がらない。ディフェンスもパワフルなポストプレー、カットインを守りきれず失点を重ねる。7分から4点連取され､10分4対8でタイムアウトを取る。その後、4点連取し同点となり、選手たちは落ち着きを取り戻す。ディフェンスもフットワークを使って位置を取り続け、粘り強く守り、濰坊の攻撃を簡単に許さないものとなる。オフェンスのリズムも良くなり、津山・石田のカットイン、村田のサイド、香川のポストにより得点し一進一退の展開となる。20分過ぎに、濰坊が退場者を出した隙に、村田のサイド、石田の速攻と3点連取し、更に木村の速攻により前半は17対14と3点差で終える。後半、1分香川のポスト、重岡の速攻で2点連取する。ディフェンスも積極的な動きで、システムが機能し始める。濰坊は徐々に突破力がなくなり、単調な攻めとなる。4分から重岡・木村の速攻、津山・石田のスピード溢れるカットインで7点連取し、8分には26対15とする。その後、膠着状態になるが16分堀のフェイント、竹内のカットイン、昆･村田のサイドで5点連取し35対21と点差を広げる。濰坊は、2名が失格するという荒いディフェンスであったが、選手はうまく対応することができ41対28で終える。

【得点】津山8、石田7、木村6、村田5、堀4、香川3、竹内2、重岡2、古川1、昆1、吉田1、木下1

◆8月27日（火）対中国戦

開始直後、中国のロング、ポストが決まり3点連取される。堀･津山･木下の速攻で追いつくが、中国のパワフルなロング、ポストの攻撃にディフェンスが崩され、失点を重ねる。ディフェンスが対応できると速攻が決まり、11分過ぎには10対9とリードする。しかし、そこからイージーミスが重なり、得点できない上に中国のロング、ポストが次々決まり6点連取され、16分10対14でタイムアウトを取る。積極的なディフェンスの徹底、落ち着いて確実にプレーすることを皆で確認する。木下・石田の速攻で2点連取し、落ち着きを取り戻す。残り4分で木下・木村・石田・吉田の速攻で4点連取し、19対18の1点リードで前半を終える｡後半に入り､村田のサイド､重岡の速攻で2点連取し3点差とするが、ミスが重なり9分から4点連取され、逆に2点リードされる展開となる。そこから一進一退の攻防が続くが、流れは中国にあり、21分2点連取される。4点差の30対34でタイムアウトを取る。その後、竹内・津山のカットインが決まり2点差と追い上げムードになる。ポスト攻撃を守れず失点するが、重岡・村田の速攻が決まり25分には34対35の1点差まで迫る。しかし、中国のポスト、更にロングとコンビの取れたパワフルな攻めを守りきれず失点を重ね、38対41の3点差で終える。

【得点】津山9、木下8、石田4、堀4、村田3、木村3、竹内3、重岡2、吉田2

フレンドシップ交流会が19時30分から富華国際会議場で行われました。各国2チームがステージで出し物を披露したり、ステージで踊ったりと友好を深め合い、楽しいひとときとなりました。

8月28日（水）は見学･研修､29日（木）予定どおり帰国し、関西国際空港で解散となりました。

選手選考会に御協力頂いた各高校の顧問の先生方、大阪府の先生方、直前合宿でお世話になった桃山学院の高橋先生・井上先生、キム先生には誌面をお借りして、感謝申し上げます。選手にとって、選考会・2泊3日の直前合宿・そして中国での交流競技会は、貴重な体験となったはずです。選手の皆さんの、今後の活躍を期待します。

第21回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

男子チーム主将　**津山 弘巳**
（宮崎県立小林秀峰高等学校）

私は日韓中ジュニア交流競技会にハンドボールの代表として参加しました｡大阪での調整合宿ではキャプテンに選ばれ､キャプテンとして代表チームを1つにまとめることの大変さを実感しました。合宿は大学生とのゲームを通してチームとしての戦術の確認を主に取り組み、はじめはプレーの連携がうまくいかずに大差で大学生に負けてしまいました。しかし、夜にミーティングをしたり練習で確認を重ねることで最後のゲームでは1点差まで詰めることができ、自分たちでも自信がついた状態で中国に移動することができました。

開催地である中国での環境は日本とは全く違うもので食生活に慣れるのも大変でした。試合の初戦は韓国とで、体格の差はあまり感じませんでしたが、スピードやフェイントのキレがあり、最後まで守りきることができませんでした。結果は40対30で負けてしまいました。続く2試合目は地元のチームとの試合でした。中国のチームというだけあって自分たちより大きい選手ばかりでした。しかし、パワー負けする場面もありましたが自分たちの持ち味でもある速攻で流れをつかみ大差で勝つことができました。最終試合は中国代表との試合でした。大きさもパワーも自分たちより上でしたが、自分たちの確実なプレーで後半ラスト10分まで3点差をつけて勝っていましたが、自分たちのイージーミスから流れを崩してしまい、逆転負けしてしまいました。とても悔しかったです。この3つの海外での試合は私にとってすごく良い経験になりました。まず体格、パワーの差です。いくら自分たちが国内で体格に恵まれていて

も海外には自分たちよりはるかに大きくて、動ける選手がたくさんいます。そういう面では全く歯が立ちませんでした。次にアウェイでの試合ということです。周りの声援や審判のジャッジも国内とは異なることばかりでした。その中で、どうプレーするか、どういう精神状態で試合に臨むかなど、国内の試合では決してすることのない経験ができました。

今回の貴重な経験をこれからのハンドボール人生に活かしていきたいと思っています。最後に、この貴重な体験させて頂いた関係者の皆様に感謝しております

第21回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

男子チーム選手　堀　広輝
（岐阜市立岐阜商業高等学校）

今回のジュニア交流会を通して、様々なことを学び自分自身が成長できたことをまず関係者の皆様に感謝しています。

国内合宿では、全国各地からの選抜メンバーとの交流を深める為に初日から積極的に話すことを心掛けました。練習中プレーの事を話すことで、コミュニケーションを取りチームの団結を図りました。ハンドに対する志の高いチームメンバーとの共同生活でいろんな考え方や意識が新鮮でとても参考になりました。

中国での交流競技会では、日本選手団としての自覚を持ち日頃の練習の成果を出せるよう体調管理とメンタル面に注意して競技会に望みました。試合で、チームプレーとして周囲を確認してメンバーを生かすプレーを意識し冷静さを保つ様に努力しましたが、国際試合での感情の高ぶりで、思うようにできない時もあり今後の課題になりました。韓国戦で感じたことは、攻撃はとてもシンプルで基本に忠実の攻め方をして、個々の身長はあまり大きくないが、能力が高くフィジカル面や独特のフェイントが速くとても優れておりシュート決定率も高かったと思いました。中国戦では、相手選手はとても体が大きく高さとパワーを生かしたプレーでシュートも速く感じました。それぞれの試合を通して、国際試合の経験を積めたことや自分のプレーが通用した事はとても自信になりました。しかし国際試合で勝つことの難しさや、スピードやフィジカル・身体作りに対して上のレベルとの差を感じ、今後の自身の課題として取り組んで行きたいと思います。また、今回中国での生活を通して地元の環境や食事の違いによるコンディションを整えることの難しさを感じました。

日韓中ジュニア交流競技会を通して、いろいろな面で自分自身大きな刺激となり大変良い経験をすることができ成長できたと思います。この経験を活かし更なる自己のレベルアップを目指し取り組んで行きたいと思っています。

第21回日・韓・中ジュニア交流競技会を振り返って

女子チームコーチ　中山　学
（岡山県立倉敷青陵高等学校）

振り返ってみると、4月20日～21日大阪府高体連専門部の方々に御協力いただきながら、堺市家原大池体育館で選考会を実施し、男女各14名を選考しました。その後は各チームで練習し、事前合宿としては8月20日大阪教育大学土井先生の御配慮で空調設備のある関西福祉科学大学の体育館でテストマッチをさせていただきました。選手とスタッフも4月以来の再会であり、戸惑いの中でチームとしてのスタートを切りました。お互いに遠慮しながらのプレーが目立ち、大学生とのゲームで課題が浮き彫りになり、その課題を翌日大阪体育大学へ移動して克服しまた修正を加えながら行いました。大学チームとの対戦で、韓国や中国との戦い方のヒントになり、意義深い合宿になりました。この場をお借りして、快く選手を出して頂いた各校顧問の先生方や関係各位に対しまして、心から厚く御礼申し上げます。

さて、中国では、移動時間や練習時間確保が大変で、難しい面もありました。特に、食事や水などの生活面での難しさは日本チームの課題だと思います。しかし、そんな中でも選手達は頑張ってくれました。優勝することはできませんでしたが、初めての国際大会で多くのことを学べたと思います。例えば、今までに経験したことのないレフェリングや身長の高さ、パワーで押し込むプレースタイルなど、様々な経験こそが大きな成果だったと思います。今後の選手達は必ずや大きく羽ばたいてくれると思います。

◆8月25日（日）対韓国　22（8－8、14－16）24

初戦が韓国ということもあり、堅さのある立ち上がりになりました。片山のミドルで先制。その後は韓国のポストプレーに苦しみ、木村の速攻などで同点で折り返しました。後半は川上智の速攻、千葉の7mTなどで互角の戦いを展開しました。15分過ぎから韓国のカットインとステップシュートで3点差がつきました。岩渕のステップシュートやミドルシュートで踏ん張ったのですが、残り8分ノーマークシュートを連続で外し、万事休す。惜しくも2点差で破れました。やはり、大事な場面でのミスが勝敗を分けました。

【得点】柴田2・川上ち1・岩渕6・千葉3・内海1・片山4・木村4・川上智1

◆8月26日（月）対濰坊　40（18－5、22－11）16

昨日の敗戦後、選手同士で自主的にミーティングを行うなど地元との戦いに備えてくれました。立ち上がりから、杜氏、藤原のミドルシュートやGK岩見の好セーブもあり、大差で前半を終えました。後半も手をゆるめることなく、集中力を持って加点しました。しかし、地元の大声援を受けた濰坊も巻き返してきましたが、日本はシン、川上ちの連続速攻など全員得点で圧勝で終わりました。

【得点】柴田2・シン2・川上ち8・杜氏2・藤原4・岩渕3・長谷川1・千葉1　内海3・片山3・木村6・川上智5

◆8月27日（火）対中国　26（15－13、11－13）26

長身選手から繰り出されるランニングシュートやカットインに対し対応が遅れる場面もありましたが、内海の速攻やBPの活躍で2点リードし、前半を終了しました。後半に入り、柴田のガッツあるポストプレーで均衡したゲームを打開したのですが、アウェイの厳しいジャッジに苦しめられ、ディフェンスでのがんばりが要求されました。残り2分で不可解な退場があり、絶体絶命のピンチにDFリーダー長谷川やGK馬場の踏

ん張りでドローに持ち込むことができました。選手達は最後まで平常心を貫いてくれ、素晴らしい選手達であることを再確認できました。

【得点】川上ち2・藤原1・岩渕5・長谷川1・千葉5・内海4・片山4・木村2　川上智2

第21回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

女子チーム主将　**馬場 敦子**
（香川県立高松商業高等学校）

私は、中国で行われた日韓中交流大会に参加しました。大会に参加するにあたり、大阪で事前合宿を行いました。メンバーと初めてプレーを合わせたのですが、やはり自分たちのチームでのプレーが出てしまい全く合わせることができませんでした。しかし、ミーティングを重ねるにつれ、お互いのプレーに合わせることができるようになり、徐々にチームらしくなっていると実感できるようになっていきました。そして3日間の合宿を経て、中国へ出発しました。

中国での生活は日本と違い戸惑うことばかりでした。なかでも食事では食べられないものが多くとても苦労しました。そんな中で初戦、韓国戦を迎えました。何人かは韓国と試合をしたことがありましたが、私自身は初めてだったので、緊張の反面楽しみでもありました。前半から韓国は右45°の左利きを軸にポストを絡めた攻撃で、得点を重ねていきました。しかし私たちも得意の速攻で点をとり、前半を同点で折り返しました。しかし、後半は右45°にロングシュートやカットイン、ポストに強引にシュートまでいかれてしまい、結局2点差で敗れてしまいました。勝てる試合だっただけにとても悔しかったです。中国戦の前日の夜に、北中先生と中山先生から「このチームで出来る最後の試合。絶対勝って終わろう！」とお言葉を頂きました。しかし結果は同点に終わってしまいました。中国の選手の強いフィジカルにあたり負けしてしまう場面が目立ち、大型シューターに上から打ち込まれてしまい、自分たちで修正することができませんでした。今思えば、苦しい場面でもっと声を掛け合って助け合えば結果も変わったはずだと思います。

私たちは、この交流大会で他国のハンドボールに触れることができ、とても貴重な経験をすることができました。13人の仲間と共に戦えたことは、かけがえのない財産です。北中先生、中山先生、短い間でしたが本当にありがとうございました。

第21回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

女子チーム副主将　**片山 愛莉**
（京都府立洛北高等学校）

2泊3日の事前合宿も含め、10日間にわたる「日韓中ジュニア交流競技会」に参加させて頂き、さまざまな経験をすることができました。試合だけでなく韓国や中国の方々と交流を深めることもできお互いの文化を肌で感じることもできました。中国での開催ということで環境の違いに戸惑うこともありましたが、日にちがたつにつれて慣れていくことができました。

初戦の韓国戦では、相手の左利きの右45°と大型ポストの絡んだプレーで得点された場面が多くありましたが、私は大型ポストの体を張って強引にシュートまでいくプレーには、特に圧倒されてしまいなかなか思うようなディフェンスをすることができませんでした。一方で、私達日本は速い速攻で得点を重ね、終始シーソーゲームとなっていましたが、最後は2点差で負けてしまいました。事前合宿の時に比べると、大分みんなの息も合うようになってプレーしていて楽しいと思えていたので、この負けは、本当に悔しいものとなりました。

中国戦では、前日のミーティングでも“絶対に勝つ！”ということを話していて勝ちたい試合でしたが、同点という結果で終わってしまいました。中国の選手は全体的に体格が大きくシュート力もあって、高い位置で当たることができていない時は上から打ち込まれていました。「バックプレーヤーに対しては一度当たってしまおう」、との戦術でしたが結構打たれてしまっていたのが勝ちきれなかった原因の一つだと思います。国際試合を通して、他の国とのフィジカル面、技術面の差を感じました。

また、日本とのレフェリーの笛の違いも感じさせられました。今まで経験したことがなかったことを経験することができ、本来ならば違うチームで戦う者同士が、同じチームの仲間として一緒にプレーすることができ、普段とはまた違う雰囲気で試合をすることができました。短い間でしたが、北中先生と中山先生と14人で一つのチームとなり、韓国、中国と戦えたことは、私の宝物です。この経験をこれからの試合や、大学生になって活かしていけるようにします。

この大会や事前合宿を支えてくださった全ての方々に、感謝の気持ちを忘れず、日々努力していきたいと思います。本当にありがとうございました。

第3回 JHLジュニアリーグ

【東ブロック・男子】順位表

	順位	北電	大同	北國	高山	名古	富谷	一宮	数	勝	分	敗	得点	失点	差	点
1	北陸電力ジュニアブルーロケッツ		14○12	19○9	16○7	28○6	24○2	41○4	6	6	0	0	142	40	102	12
2	大同フェニックス東海	12●14		11○8	19○7	15○9	41○5	37○1	6	5	0	1	135	44	91	10
3	北國ハニービージュニア	9●19	8●11		10○6	14○9	15○6	16○6	6	4	0	2	72	57	15	8
4	高山ブラックブルズジュニア	7●16	7●19	6●10		9○8	19○3	30○5	6	3	0	3	78	61	17	6
5	HC 名古屋ハンドボールスクール	6●28	9●15	9●14	8●9		10○8	20○5	6	2	0	4	62	79	-17	4
6	レガロッソ富谷ジュニア	2●24	5●41	6●15	3●19	8●10		8○7	6	1	0	5	32	116	-84	2
7	ブルーファルコンジュニア一宮	4●41	1●37	6●16	5●30	5●20	7●8		6	0	0	6	28	152	-124	0

※勝敗（○△●）の上が得点、下が失点を表す。

【東ブロック・女子】順位表

	順位	北電	北國	大同	名古	高山	富谷	一宮	数	勝	分	敗	得点	失点	差	点
1	北陸電力ジュニアブルーロケッツ		11△11	19○8	16○6	20○8	21○4	22○2	6	5	1	0	109	39	70	11
2	北國ハニービージュニア	11△11		14○3	15○6	16○5	16○0	22○0	6	5	1	0	94	25	69	11
3	大同フェニックス東海	8●19	3●14		9○5	13○7	12○7	12○2	6	4	0	2	57	54	3	8
4	HC 名古屋ハンドボールスクール	6●16	6●15	5●9		8○4	9○3	14○2	6	3	0	3	48	49	-1	6
5	高山ブラックブルズジュニア	8●20	5●16	7●13	4●8		14○6	16○7	6	2	0	4	54	70	-16	4
6	レガロッソ富谷ジュニア	4●21	0●16	7●12	3●9	6●14		15○6	6	1	0	5	35	78	-43	2
7	ブルーファルコンジュニア一宮	2●22	0●22	2●12	2●14	7●16	6●15		6	0	0	6	19	101	-82	0

※勝敗（○△●）の上が得点、下が失点を表す。

【西ブロック・男子】順位表

	順位	琉球	湧永	オム	広島	SAKU	トル	数	勝	分	敗	得点	失点	差	点
1	琉球コラソンジュニア		14○13	15○9	24○11	28○14	28○5	5	5	0	0	109	52	57	10
2	湧永レオリック安芸高田	13●14		19○13	17○9	26○8	24○4	5	4	0	1	99	48	51	8
3	オムロンジュニアピンディーズ	9●15	13●19		17○12	24○5	19○1	5	3	0	2	82	52	30	6
4	広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ	11●24	9●17	12●17		19○10	23○3	5	2	0	3	74	71	3	4
5	BLUESAKUYA ジュニア	14●28	8●26	5●24	10●19		13○10	5	1	0	4	50	107	-57	2
6	レッドトルネードジュニア	5●28	4●24	1●19	3●23	10●13		5	0	0	5	23	107	-84	0

※勝敗（○△●）の上が得点、下が失点を表す。

【西ブロック・女子】順位表

	順位	オム	琉球	広島	トル	SAKU	数	勝	分	敗	得点	失点	差	点
1	オムロンジュニアピンディーズ		21○6	19○6	22○3	23○4	4	4	0	0	85	19	66	8
2	琉球コラソンジュニア	6●21		12○11	17○8	23○3	4	3	0	1	58	43	15	6
3	広島メイプルレッズジュニアスポーツクラブ	6●19	11●12		14○5	17○7	4	2	0	2	48	43	5	4
4	レッドトルネードジュニア	3●22	8●17	5●14		16○5	4	1	0	3	32	58	-26	2
5	BLUESAKUYA ジュニア	4●23	3●23	7●17	5●16		4	0	0	4	19	79	-60	0

※勝敗（○△●）の上が得点、下が失点を表す。

総　評

日本ハンドボールリーグ委員会副委員長　田中 秀昭

去る8月8日（木）～10日（土）に日本リーグ傘下のジュニアチームによるリーグ戦を東西2つのブロックで開催致しました。猛暑の中、小学校高学年の選手たちは、日本リーグチームと同デザインのユニフォームを着て、はつらつとした素晴らしいプレーを次々と披露して、応援の父兄や来場者を興奮させました。また、技術レベルは確実に毎年上がってきており、大会関係者を驚かせました。

東ブロックは、一宮市総合体育館で愛知県ハンドボール協会、一宮市ハンドボール協会の協力の元、男女それぞれ7チームが1回戦総当りリーグ戦を行いました。男女とも接戦を制したのは北陸電力ジュニアブルーロケッツでした。特に女子は、北國ハニービージュニアと勝ち点で並び、総得失点差での1位獲得でした。

西ブロックは、広島サンプラザホールで広島県ハンドボール協会、広島メイプルレッズの協力の元、男子6チーム、女子5チームが1回戦総当りリーグ戦を行い、男子は3年連続で琉球コラソンジュニアが、女子はオムロンジュニアピンディーズが初めて1位を獲得しました。こちらも男子は湧永レオリック安芸高田と最後まで手に汗握る大激戦を演じ、会場が大いに盛り上がりました。

東西の1位チームは、来年3月に東京・駒沢体育館で行われるプレーオフの際に優勝決定戦を行います。激戦必至で大変楽しみです。

また、期間中には社会科見学（東ブロック：かがみはら航空宇宙科学博物館、西ブロック：平和記念資料館）と交流会を実施しました。交流会では各チームが自チーム紹介とともに歌や一芸を披露、相互の交流をはかるとともに、現役選手や元日本代表選手とも交流ができ、夏休みの1ページを飾る思い出ができたと思います。

開催にあたっては、愛知県、一宮市、広島県の各ハンドボール協会並びに広島メイプルレッズの皆さんには大変ご苦労をお掛けしました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

【東ブロック・男子優勝】
北陸電力ジュニアブルーロケッツ

北陸電力ジュニアブルーロケッツ男子　朝倉 士詠

大会最終日前夜のミーティングで、監督は選手一人一人に明日の試合でするべきことを話してくれた。
「いつもの自分たちのハンドボールをすれば、必ず勝てる。練習してきたことをやればいい。」と、元気よく声をかけてくれた。

去年の予選大会では、自分たちの持っている力を出し切れずに負けてしまった。とても悔しかった。だから今年は絶対勝って東京に行くと決めていた。

最後の東海戦、お互いに全勝で対決だ。僕たちのチームには背が高い人がいない。だからスピードと声出しとチームの団結で勝つしかない。試合は激しい戦いだった。僕たちにとって今年のベストゲームになった。チームが一つになって勝ち取った勝利だ。

【東ブロック・女子優勝】
北陸電力ジュニアブルーロケッツ

北陸電力ジュニアブルーロケッツ女子　竹内 琉奈

次も勝つぞ…

私が、キャプテンになって２回目の優勝です。１回目は、北信越大会、２回目は今回のJHL東ブロック大会です。２回優勝できたのも、６月にあった大会県予選で負けた悔しい思いを忘れずたたかったからだと思います。本当に良かったです。東ブロック代表として日本一目指して頑張りたいです。今回のJHL東ブロック大会決勝では、北國ジュニアと対戦しました。前半４対６で負けていたけど後半追いついて11対11の同点で最後は得失点差の１点差で勝ちました。嬉しくて試合後体がとっても軽くなりました。西ブロック代表の決勝は今年全国小学生大会で１位になったオムロンジュニアと戦うので頑張って勝ちたいです。去年は、JHLジュニアリーグ決定戦で優勝したので今年も絶対に勝ちにいこうと思います。

【西ブロック・男子優勝】
琉球コラソンジュニア

琉球コラソンジュニア監督　水野 裕矢

第３回 JHL ジュニアリーグ（西日本大会）優勝

８月８日から10日にかけて行われた第３回JHLジュニアカップ西ブロック大会では初の単独チーム（これまでは県選抜チーム）での参加となり、どの試合も気が抜けない展開となりました。その分チームとしてはいろいろな面で学ぶことが多く貴重な体験となりました。３月に行われる決定戦では、西日本代表として日本一を目指して、監督、コーチ、選手共に精一杯取り組んでいきたいと思います。

最後にJHLリーグ、広島県ハンドボール協会、広島メイプルレッズ、湧永製薬を初め今大会にご尽力いただいた大会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

琉球コラソンジュニア主将　仲本 陽生

第３回 JHL ジュニアリーグ（西日本大会）優勝

８月８日から８月10日にかけて広島県で行われた第３回JHLジュニアカップ西ブロック大会に参加しました。この大会では、男女共に２連覇を達成しておりプレッシャーもありましたが、僕達は３連覇を意識せず自分達のプレーを一生懸命したいという気持ちで挑みました。でも初日は緊張からか、ミスの連続でした。監督から「落ち着いて普段のプレーをするように」と言われてから自分達のプレーができ、良い結果を残すことができました。今回の大会では、ディフェンスと基本的なミスを減らすことだと再確認できました。今後はこの２点に気をつけて頑張りたいです。

最後に、この貴重な遠征をサポートして下さった方々、本当にありがとうございました。

【西ブロック・女子優勝】
オムロンジュニアピンディーズ

オムロンジュニアピンディーズ監督　舛田 真一

今大会の出場にあたっては、オムロンの黄ヘッドコーチはじめ選手のみなさんの温かいご指導のもと、子どもたち一人一人がハンドボールの楽しさを味わいながら臨むことができました。初めはお互いに遠慮しがちの様子でしたが、自然と仲良くなっていき、試合ごとにチームとしての成長が感じられました。特に昨年度優勝の琉球コラソンジュニアとの一戦は、ディフェンスの連携がうまく機能し、サイドからの速攻やポストを生かした攻撃へと展開することができ、子ども達もいきいきとプレーしていました。優勝が決まった瞬間はみんな大喜びで、「みんなが試合に出場でき、勝ててうれしかった」と感想を述べていました。子ども達にとって貴重な経験となったことをスタッフ一同うれしく思います。

オムロンジュニアピンディーズキャプテン 北川 舞衣

JHL ジュニアリーグに参加して

この大会に参加したことで、たくさんの経験をすることができました。まず、いろいろなチームと交流し、仲良くなれたことです。試合を通して、他のジュニアチームのメンバーとも仲良くなることができ、楽しんでプレーすることができました。また、日々の練習の大切さもわかりました。大会前の合同練習では、黄監督やオムロンの選手の方々から、たくさんのことを学びました。練習中は、きついこともあったけれど、この優勝をつかむまで頑張ってこれたのは、チームの皆の気持ちが一つになり、お互いにはげましあってきたからだと実感しています。私は、この大会に出場できて本当によかったです。

この経験を生かし、これからも大好きなハンドボールを頑張っていきたいです。

2013 NTSブロックトレーニング報告【近畿】

NTS 近畿運営委員長　繁田 順子

開催日時：2013年8月24日（土）～25日（日）
場　　所：大阪府　堺市家原大池体育館
参 加 者：NTS スタッフ　29名
（総数）　補助指導者　66名
　　　　　選手　小学生　36名
　　　　　　　　中学生　35名
　　　　　　　　高校生　35名

今年度より近畿2府4県最後の持ち回りで大阪府が担当します。毎年、各カテゴリーで充実したトレーニングを行うことができていましたが、中学生と高校生につきましては今年度より宿泊を伴うトレーニングを実施しました。

初めて宿泊が伴われるということもあり、例年以上に宿泊してくださる指導者もたくさんいてくださり、会場のコートサイド、観客席、宿舎での食事会場などいたる所で、今回のトレーニングの内容について意見交換がなされていました。さらにはハンドボールという競技を含めたハンドボール界への思いをディスカッションしている場面も多く見受けられ、スタッフ一同とてもうれしく思いました。

また、中学生や高校生の選手につきましても、1日目のトレーニングよりも2日目のトレーニングでは積極的にコミュニケーションをとることができていて、同じ釜の飯を食った仲間ではないですが、今まで以上に親密な関係になれたと思います。ゲーム形式の練習の際にも他府県の選手同士でもコンビプレーなども見られ、宿泊を伴ったことが、より有意義なトレーニングにつながることができたと思います。

今後の課題としては体育館の確保が難題です。公共の体育館が確保できなかったとき、トレーニングの内容も変更を余儀なくされてしまいます。選考面では低学年からの選出がチーム事情も重なり、各府県とも苦慮しているようです。

末筆ながら、2020年東京オリンピックの開催決定をお喜び申し上げるとともに、NTSトレーニングシステムのさらなる充実でナショナルチームの活躍につながることを祈念いたしまして、近畿ブロックの報告とさせていただきます。

2013 NTSブロックトレーニング報告【中国】

中国ブロック運営委員長　森山　透

平成25年8月19日（金）から11日（日）まで湧永満之記念体育館において、高校生・中学生・小学生の順で開催しました。中国ブロックでのNTSトレーニングは、体育館使用をはじめ、湧永製薬様から指導者・デモンストレーターの派遣など全面的な協力で成り立っており、まずここで感謝の意を表したいと思います。また、各カテゴリーの指導者の方々には、NTSの趣旨をご理解いただき、忙しいスケジュールにもかかわらず参加いただき感謝致しております。

今年度は高校生が男子15名、女子14名、中学生が男子15名、女子13名、小学生の男子が15名、女子16名、指導者の参加数が45名。総勢160名が参加し東慶一技術委員長（山口県）を筆頭に17名のスタッフの指導で3日間のトレーニングが行われました。運営面においても、各県委員の方の参加と協力のお蔭で、全日程を無事に終了することが出来ました。

活動内容として高校、中学のトレーニング内容は午前中にOFトレーニングを行ない、サイドシュートを中心にFBまで、午後からはDFトレーニングから6：6の攻防をし、10分のゲームで終了しました。小学生はファンダメンタルトレーニングやアームムーブメントなどを行い、シュートトレーニングから8分のミニゲーム（新ルールを使って）を行いました。中国ブロックトレーニングのこれまでの特徴は、各カテゴリーに1日を掛けて実施したことにより、集中的に濃い内容で選手・指導者にも多くのことをフィードバックしてきた点です。中学男子では全国中学校において第3位、女子が準優勝、高校も山口県、岡山県勢の活躍、小学生チームもクラブチームを中心に底辺が拡大してきています。また、技術指導委員やインストラクターも充実しており、日本リーグ経験者が小中高各カテゴリーで指導できる体制も整っていることに加え、デモンストレーターには全日本選手を数多く輩出している湧永製薬の選手からの適切な指導・助言は参加選手達に分り易く伝わるばかりではなく、夢を持たせる事にも繋がっており、他ブロックにはない事ではないかと思います。

今後の課題としては、宿泊を伴う形で行うにあたっての予算面は勿論、中国ブロックにおける土日開催スケジュールでは2面とれる会場を2日間確保するのが難しい事です。そこへ選ばれてくる選手の過密スケジュールによる疲労やモチベーションの低下など、指導普及なのか育成なのか、どちらに主眼を置いたトレーニングとして実施すべきなのか、参加者それぞれにおいても競技力・意識の差があり実際のトレーニング運営に支障を来すこともあります。

まだまだ多くの課題はあると思いますが、中国ブロックの特徴を生かし、皆さんに協力して頂きながら一人でも多くのユース選手からナショナル選手が育つように本ブロックトレーニングを行っていきたいと思います。

2013 NTSブロックトレーニング報告【四国】

四国ブロック運営委員長　**田中 達男**

四国では、2013年度NTS四国ブロックトレーニングを次のように開催いたしました。

1　場　所：愛媛県松山市総合コミュニティセンター体育館

2　日　時：平成25年8月24日（土）～25日（日）

3　参加者：総数123人

小学生　男子 9人・女子 9人

中学生　男子 12人・女子 12人

高校生　男子 11人・女子 11人

引率指導者 29人・インストラクター11人

NTS委員 4人・運営委員 2人

デモンストレータ 13人

今年度も「NTS四国ブロックトレーニング」（実施要項）を作成し、組織の充実を図るとともに、NTS委員の各役割を明確化し、ブロックから各県へNTSの組織や意義、一貫指導内容の伝達と一貫指導体制の構築ができるようにしました。

今年度は、初めての会場でNTS四国ブロックトレーニングをコート3面を使用して、小・中・高の各カテゴリーを同じ日程で運営しました。また、インストラクターを増やしたことにより、これまで以上に充実した指導体制となりました。このことにより、各県においてもNTSの発掘育成システムを十分に理解したうえで、指導ができるものと期待しています。

今後の課題としては、次の四点が挙げられます。①小・中・高の一貫指導体制となると、まだまだ課題があります。②選手個々の負担と指導者の育成には、まだ課題が残されています。③中学生のカテゴリーでは、1泊2日間のトレーニングが2年目となり、指導者側から新たな課題が出されています。④小学生のコートが正規ではなかったため、十分な指導をすることができず、会場や同日開催については、

大きな課題となりました。

最後になりましたが、開会式から日本協会小学生委員会委員長である山本繁氏に出席していただき、あいさつやトレーニングの指導状況を見ていただく絶好の機会を得ることができましたことを感謝申し上げます。また、香川銀行の選手をはじめ、運営に当たった多くの関係者の皆様には、深く御礼申し上げますとともに、NTS四国ブロックトレーニングが、今後さらに、充実したものになるよう御理解と御協力をお願い申し上げます。

2013 NTSブロックトレーニング報告【九州】

九州ブロック運営委員　安達 隆博

2013年度のNTS九州ブロックトレーニングは、高校生8月19日・20日、中学生26日・27日、小学生26日と4日に渡り、熊本県山鹿市におきまして盛大に開催することができました。山鹿市は、オムロンの本拠地。地元の人達からもハンドボール活動へのご理解、ご協力をいただいており、本年度8月はNTS九州ブロックトレーニングだけでなく、九州中学校ハンドボール競技大会、西日本学生ハンドボール選手権大会、九州学生ハンドボールリーグ秋季大会と大きな大会を数多く開催させていただきました。熊本県ハンドボール協会をはじめ、山鹿市総合体育館、山鹿市観光協会には心より感謝申し上げます。

NTS九州では、指導スタッフに末岡先生（瓊浦高校）北林先生（都城工業高校）黄さん（オムロン）小藪さん（ソニー）金さん、呉さん、松野さん（トヨタ紡織九州）小波津先生（鏡原中学校）《今回はジュニアアカデミーのため不参加》古谷先生（敷戸小学校）といった日本を代表する経験豊富なスタッフ陣を迎え、また、オムロン、トヨタ紡織九州の日本リーグ選手達もデモンストレーターとして精力的にサポートしていただきました。はじめは不安な選手達も、スタッフ陣の熱意が伝わっていくのか、時間が経つにつれて活気あるトレーニングとなっていきました。選手にとっても指導者にとっても充実した内容になったと感じています。

九州ブロックでは、6月に全体会議を開催します。全九州高校大会開会式前の時間に各県運営委員に集まってもらい、その年度のトレーニング参加者の推薦、主旨、運営方法等について議論を交わします。九州ではこの会議を行うことで、後の運営がスムーズに進むこととなっています。インストラクター陣は事前のDVDと打ち合わせで内容を確認しています。実際のトレーニングでは、北林先生のウォーミングアップからスタートします。指導映像の内容を中心とした的確なアドバイスが選手・指導者に好評となっています。その後、すぐに体力測定です。オムロンやトヨタ紡織九州の選手達が協力してくれ、測定記録も行ってくれています。その後のボールを用いたトレーニングでは、インストラクターの先生方が選手の動きに応じて独自のアレンジを加えてくれます。要所でオムロンやトヨタ紡織九州の選手達も積極的にアドバイスをしてくれます。GK専門のインストラクターから指導を受けることができるのもNTSの特徴ではないでしょうか。

昨年より中学生が1泊2日となったことで高校生と同じ内容を盛り込むことができました。大変充実したトレーニングとなったと感じています。今後も継続していくべきだと考えています。小学生は、技術的に高いレベルの選手が多く集まりました。この選手達が今後中学生、高校生になってさらに大きく成長してくれることを心から願っています。

今後の日本ハンドボールのレベルアップのために“九州はひとつ”をスローガンに、さらなる飛躍を目指して来年もより良いNTSブロックトレーニングとなるように努めていきたいと思います。

～東京五輪2020の使命は?～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

2020年のオリンピック開催都市に「東京」が決まった。日本の裏側、アルゼンチンのブエノスアイレスで争ったスペインのマドリード、トルコのイスタンブールとの闘い。

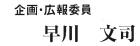
まずマドリードが脱落。イスタンブールとの決選投票は、東京60票、イスタンブール36票、東京が圧勝した。

56年ぶりの開催、そして除外候補になったレスリングも存続となった。今後、各競技団体は強化に本腰を入れて取り組むだろう。

日本ハンドボール協会の渡邉会長も東京決定に関して「史上最強の日本代表をつくるべく球界が結束して強化方針をさらにブラッシュアップする」とのメッセージを発している。

そうした中、安倍総理は開催地決定後の記者会見で「スポーツ振興をしっかり図りたい」と述べた。国のスポーツ予算は増えそうだし、文科省、厚労省などに分かれているスポーツ行政は「スポーツ庁」の設置で一元化しそうだ。競技スポーツの環境は確かによくなるに違いない。

しかし、スポーツ振興とは競技面だけではない。市民がスポーツを楽しむ環境整備が大切だ。生涯スポーツの普及に力を注いでもらいたいものである。

一昨年、すべての人にスポーツを楽しむ権利を保障する「スポーツ基本法」が成立した。とはいえ、文科省が先に公表した世論調査では、過去1年間で「スポーツをした人」は50%を切っている。「スポーツをしなかった人」は、その理由として仕事や育児などで時間がない — などとしている。

オリンピックの開催が市民スポーツ、生涯スポーツをするきっかけになるにはどうすべきかを真剣に議論することが重要だ。

多くの人たちが「身体を動かす」ことに目覚め、スポーツ一家が増えれば、自ずから競技スポーツの底辺も広がりを見せるだろう。

ハンドボール界にとっても決してマイナスではなく、プラスの作用があるはずだ。底辺が広がれば当然ながらトップのレベルアップにもつながってくる。

まずはハンドボールという競技を世間に広く告知することから始めることだろう。「東京」という舞台には立てるが、その前の「リオ」の舞台に立って、「東京」につなぐことは何としてもしなくてはならない大仕事である。

トップの強化とともに市民スポーツを介しての底辺の拡大。この二つを並行して進行させる手段を検討すべきではないだろうか。手に入れた「東京」をメジャー化への一歩につなぎたい。それが球界の使命だろう。

2013 EHF Youth Coaches' Course

18th – 21st August 2013 in Gdansk, Poland

2013年 EHF（ヨーロッパハンドボール連盟）ユースコーチコース

8月18～21日　場所　ポーランド（グダニスク）

【報告者】名古屋市立西養護学校（HC 名古屋ジュニアコーチ、東海学園大学コーチ）岩塚 善哉

キーワード：教育システム、ハンドボールビジョン、U17 女子ヨーロッパチャンピオンシップ

Ⅰ．概要と日程

■EHF の CAN について

EHF（Europe handball Federation）は約 50 ヵ国が加盟しており、CAN（Competence Academy & Network）というシステムを作っている。コーチング技術の向上や、新しい考えやノウハウを講義やインターネットを通じて共有することを目的として、教育のサービスセンターとして設立されている。

そして、CAN のシステムの一つとして、1996 年以降様々なコースを開催しており、マスターコーチコースやトップコーチセミナーに並び、ユースコーチコースは重要な位置づけとなっている。

今回のユースコーチコースは 4 日間の日程で構成されており、EHF のコーチ陣が講義を行ったり、実技講習をしたりするもので、練習メニューの紹介や U17 女子ヨーロッパチャンピオンシップのトレンドなど紹介があり、U17 女子ヨーロッパチャンピオンシップの開催（8/15 ～ 25）に合わせて、選手の育成方法やユース時期におけるコーチングについて学んだセミナー内容を報告する。

■主催　ヨーロッパハンドボール連盟
ポーランドハンドボール連盟

■メイン講師　ポーランド　Wojciech Nowinski
オランダ　Monique Tijsterman
チェコ　Martin Tuma

■プレゼンター　ポーランド　Jerzy Eliasz
ポーランド　Wojciech Nowinski
ヨーロッパハンドボール連盟　Helmut Horitsch
ヨーロッパハンドボール連盟　Beata Kozlowska

■日程

8/18
・ハンドボールビジョンについて
・ステップの指導について／ユース期（女子）における教育的トレーニング
・パスとシュートのトレーニング
・チームのシュートトレーニングとゴールキーパートレーニング
・ヨーロッパチャンピオンシップ２試合観戦

8/19
・ウィングプレイヤーの技術について
・ピヴォットプレイヤーの技術について
・パス、シュート、ランニング、ボディフェイントについて
・ユース期（女子）におけるゴールキーパーのフィジカルトレーニング
・ユース期（女子）におけるゴールキーパーの戦術的トレーニング

8/20
・試合における６：０、５：１ディフェンスシステムの哲学
・コーチングとレフェリングについて
・クロスとポジションチェンジの攻撃について
・個人、グループ、チームにおけるファーストブレークとターンバック
・ディフェンスにおけるボールスチール - 個人およびグループ練習
・ヨーロッパチャンピオンシップ２試合観戦

8/21
・チームオフェンス、ディフェンスのグループ練習
・ヨーロッパチャンピオンシップの分析
・EHF コーチングライセンスシステムについて
・ヨーロッパチャンピオンシップ２試合観戦

Ⅱ．Youth Coaches' Course に参加して

■実技講習全般を通して

このコースは、17 歳以下の女子選手の指導を目的として行われているということで、練習内容は基礎的なものが多いように感じた。例えば、シュートを打つにあたって必要な体周りの筋肉であることから、この部分が弱いと「体が反ってしまい力強いシュートを打つことができなくなってしまう」ということを選手に伝えながら体幹トレーニング（資料１）の紹介を行ったり、サイドシュートでは「高く跳ぶ」ということを徹底して選手に伝えたり、速攻練習やセット練習では常に「前（ゴール）を見る」ということを徹底して指導したりしていた。

また、EHF コーチ陣は練習メニューに必ずコンセプトを持って指導を行っているのが印象的であった。遊び的な要素をアップに取り入れたり、練習に選手同士が競争意識を持たせたりする練習メニューが多く、選手が飽きずに取り組むことができるように工夫していた。なお、Youth Coaches' Course で使用されたスライドや、細かい練習内容（資料２）などは、EHF サイトにおいて閲覧できるようになっている。（http://activities.eurohandball.com/EHFCAN/15411）

■キーパー練習について

EHF のコーチ（wojciech Nowinski 氏）からは、初めにキーパーの基本の構え（資料３）について説明があった。足は肩幅ほどに開き、ゴールポスト側への対応ができるように、つま先は少し開く。腕は肩のラインより少し前方に構え、ボールが当たった瞬間に手のひらがボールの勢いで後方にいかないように注意して構える。肘の角度は 90 度より少し広く取り、前方を向いた状態で、指先が見える位置をキープして構える事が大切だということを述べていた。

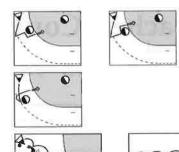
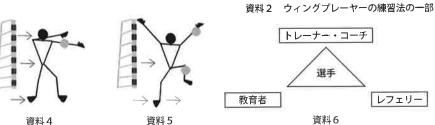
また、キーパー練習の紹介では、様々な動きづくりの練習や、俊敏性を高める練習の紹介があった。コートプレーヤーは 6m ラインの中にジャンプしてシュートをすることを想定して、シュートをする選手は、6m の中のゴールキーパーラインのあたりから打たせてキーピングの練習を行っていた。

さらに、U17 女子選手の練習方法と成人とはキーピング方法が異なるということを述べていた。特に、サイドシュートのキーパー練習では、U17 女子選手は発達段階という点から、基本の構えを崩して、流しへの対応は腕をいっぱいに伸ばして身体全体でとめる練習を行う（資料４）。しかし、身長が伸びて成人となったときには、

資料1　体幹トレーニングの一部

資料2　ウィングプレーヤーの練習法の一部

資料3　キーパーの基本の構え

資料4　資料5　資料6

資料7　Monique Tijsterman 氏

頭上や顔横への対応を腕や手で行いつつ、軸足ではない方の足を上げて脚でとめるように行う（資料5）。年齢（身長）によってキーピング方法が異なり、キーパーを中心とした練習メニューは1週間に1回は取り入れることが望ましいという。

このことは、身長が低い選手と高い選手では、練習方法を変えなければならないということであり、一律に同じ練習をするだけではなく、選手に合った練習方法を取り入れていかなければならないと考える。

■ワンハンドキャッチについて

最近日本でも取り組むことが多くなってきたワンハンドキャッチについては、実技講習中にラトビア人コーチが「いつからワンハンドキャッチの練習を始めるのが良いのか」という質問をした際に、EHF のコーチ（Monique Tijsterman 氏）は、「女子選手は、18 歳から取り組んでいる」ということを述べていた。続いて男子の片手キャッチについて筆者は尋ねたところ、「男子は 19 歳から取り組む」ということであった。実際には、U17 女子ヨーロッパチャンピオンシップの試合を観戦していると、速攻場面で片手キャッチをしている選手は多くおり矛盾を感じたが、この講習会では 17 歳以下の女子の練習に絞っており、4日間を通して、基礎的な部分を身に付けさせることをコンセプトに行われていたことや、ヨーロッパで使用されているハーピクスという松ヤニは非常に粘着力が強く、glue（のり）と呼んでいるほどボールが手に良くくっつき、松ヤニを付けることで自然とワンハンドキャッチができるようになっていることが起因している。

Ⅲ．オランダの教育システム

■ハンドボールビジョンについて

EHF 講師の Monique Tijsterman 氏（資料7）による、ハンドボールビジョン（Oranje Plan）について紹介があった。

Oranje Plan とは、オランダにおけるハンドボール教育システムのことで、2002 年から始まり、このシステムは、ナショナルチームへのステップとなり、ジュニアチーム、ユースチーム、ナショナルチームまでの教育ビジョンがあり、ジュニアから明確なビジョンを作ることによって、中長期にわたる目標を設定し、選手は適切なトレーニングの指導受けることができる。

このシステムにおける重要なことは、正しいプレーの方法を理解、定着させること、明確なトレーニングを行うこと、戦術的な動きやポジションチェンジなど、選手が動き続けるようになることである。スター選手を育てていくには、教育者、レフェリー、トレーナー・コーチが一体となって選手を育成に努めていかなければならない。（資料6）

トレーナー・コーチを教育し、ブレインストーミングなどで新しいアイディアを引き出し、「どのようなハンドボールをするのか」、「どうやってトレーニングをするのか」など、教育者やレフェリーとの連携によって選手の育成につなげる。そして、他国のハンドボールや文化を取り入れ、真似るだけでなく、過去、現代を研究し、未来を見通してオランダ独自の明確なビジョンを作り、最終目標であるオリンピックに焦点をおいて取り組んでいる。

■ハンドボールアカデミーについて

1週間に 16 時間のトレーニングと学習を合わせたプログラムを行っている。ナショナルトレーニングセンターの設備としては、トレーニング施設、ホテルなどの施設の確保をしている。ナショナルユースチームは、このナショナルトレーニングセンターで、週に1度トレーニングを行っており、食事や栄養についての勉強をしたり、選手の目標意識を高めるために家族も連携してカウンセリングを行ったりしている。スタッフには、ストレングス・コンディショニングトレーナー、医者や理学療法士、栄養士、ライフスキルコーチ、そして、スクールガイダンスを置いている。

選手は試合や練習における自身の点数をつけたり、トレーナーが選手の点数をつけたりしている。そうすることで、何が足りていないのかが明確になり、改善すべき点が見えてくる。また、コミュニケーションを取る時間を確保し、両親との連絡やクラブや学校などとの連携を促している。

トレーニング時間については、1週間に約8時間のストレングストレーニングと約8時間のハンドボールコンディショニングトレーニングを行っている。なお、ハンドボールコンディショニングトレーニングの2時間はクラブとの試合を確保している。トレーニング内容については、技術面、戦術面、メンタル面、社会的側面において、トレーニングを行っている。そして、この7年間の取り組みで、17 歳～ 19 歳のヨーロッパチャンピンシップや、世界選手権において現在、2～3位と徐々に結果が現れ始めており、今後のオランダのハンドボール界に注目したい。

Ⅳ．U17 女子ヨーロッパチャンピオンシップについて

Niewrzawa 氏による U17 ヨーロッパチャンピオンシップの分析

では、どのナショナルチームも良く走り、テンポの良いゲーム展開し、6：0ディフェンスシステムが多くの国で行われていると分析している。

資料8　U17女子ヨーロッパチャンピオンシップ

資料9　ポロシャツやノートなど

資料10　LynnMcCafee 氏

オフェンスのトレンドは、技術面、フィジカル面において非常にレベルが高くなってきており、短いアクションで（クイック）シュートをする選手が増え、ワンステップでジャンプシュートを打つことが多くなってきている。また、ロングシュートが少なくなり、ディフェンス突破後のゴールが増えている。

ディフェンスのトレンドは、アグレッシブなディフェンスの傾向がある。多くの国で基本は、6：0ディフェンスを用いているが、流動的に隊形を変えて5：1ディフェンスを用いて守っていることが多い。6：0ディフェンスでは、常にライン際にいるのではなく、オフェンスに対してアタック、プレッシャーをかけ、アグレッシブに動いて守り、ミスを誘発（provocation）している。それゆえに、ブロックが少ないディフェンスシステムがトレンドとなってきている。また、ディフェンスがアグレッシブに動いて守っているチームが増えている傾向がある理由として、トランジション（きり）の動きが増えたことや、ウィングプレーヤーがピヴォットプレーヤーと連携して攻撃をしかけるようになったからである。

筆者は実際に、U17女子ヨーロッパチャンピオンシップを観戦して、オフェンスでは、どこのナショナルチームもシュートの時の肘の位置が非常に高く感じた。文章では表現しにくいが、頭の後ろにボールを持ってきた後、肘を折りたたむようにシュートを打っているようだった。ディフェンスでは、ルーズボールになった瞬間に、マイボールにするため滑り込んでボールを取る場面が何度もあり、ボールを奪うという点で、意識が高いように感じた。また、観客は、鳴り物を使い応援をしており、レフェリーの笛の音がかき消されるのではないかというような音で、デレゲーターやレフェリーへも遠慮なく罵声しており、このような環境で平常心を保てるようなメンタルが選手には必要であると感じた。

V．最後に

筆者は、EHF のサイトを見て、この Youth Coaches' Course の存在を知り、連絡を取り参加をさせてもらった。全日程4日間で、講義やトレーニングの紹介や U17 女子ヨーロッパチャンピオンシップを含めて、9時から8時半までのセミナーを受講し、資料やポロシャツやノート（資料9）などを頂くことができ、セミナー終了後には、修了証も受け取った。

このセミナーでは、ヨーロッパにおける教育システムやコーチングについて学ぶことができる上、この講習会では、60人の参加者がおり、ポーランド、クロアチア、オーストリア、イギリス、カタールなど、様々な国々のコーチたちとの交流ができ、EHF との方々とつながりができたことは大変意義があった。

特に、1999年 IHF World player of the year（世界最優秀選手）に選ばれた元オーストリア代表 Austra Fridrikas 元選手や、ロンドンオリンピックイギリス代表 LynnMcCafee 元選手（資料10）もこのセミナーに参加されており、実技講習の休憩時間には、Austra Fridrikas 氏と一緒にキャッチボールをする機会があり、とても良い経験となった。

LynnMcCafee 氏が Youth Coaches' Course の参加にあたり、EHF は、インタビューをおこなっている。（EHF サイト（http://activities.eurohandball.com/article/17580）その中で、LynnMcCafee 氏は以下のように述べている。

「（イギリスにおいて）オランダの教育システムのようにイギリスでも教育システムを行っているが、まだ、経験を積んだコーチがおらず、明確なビジョンをもってユースの選手を育てていく環境が整っていません。」また、「多くの国々では、施設整備について尽力したことや、体育館での松ヤニの使用ができるように努力をし、その問題点と向き合っています。」そして、「ロンドンオリンピックを機にハンドボールへの興味関心が高まってきています。」などのことを述べている。

松ヤニ使用可能な体育館の普及や、オリンピック開催という点など、イギリスのハンドボール事情と日本のハンドボール事情は非常に似た側面を持っており、ロンドンオリンピックでハンドボールに興味関心が高まったと述べているように、日本においても、2020年東京オリンピックまでに明確なビジョンをもって選手を育成し、ハンドボールが日本においてメジャースポーツになることを期待している。

最後に、この機関誌に携わり、現地でのやり取りや連絡調整などご協力いただいた日本協会の角先生、駒澤大学の村松先生、東京理科大学の市村先生、鹿児島大学の森口先生に深く感謝している。

体罰によらないスポーツ指導への期待

鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系　佐藤　豊

1　はじめに

東京オリンピック2020決定の報道は、スポーツ関係者のみならず老若男女を問わず多くの国民にとっての希望と夢を与えた。自身が出場しないオリンピックの決定にどうして我がことのようにわくわくするのであろうか。多くの人々にとっては、身近でトップスポーツの選手と出会えるという期待感であり、みるスポーツの広がりがある。近代オリンピックの理念は、クーベルタン氏が述べた「参加することに意義がある」という有名な一節に集約されているように、スポーツを通した世界平和と国際親善を願うものである。さらに、近年では、持続可能な開発の実現など、スポーツが一過性のイベントとしてお祭りで終わるのではなく、後生にどのようなレガシィ（遺産）を残すのかが求められている。首都高速や新幹線の開通は、前回オリンピックが日本の近代化に物質的レガシィを残した。2020年に開催される東京で残すべきレガシィは、前回と同様ではない。世界をリードする先進国として、老若男女にスポーツの多様性が保証され、持続可能なシステムとしてスポーツが位置付き、文化的価値として高められているという精神的レガシィを残すことが求められるであろう。

それは、オリンピックムーブメントの理念がどれだけ国民に合意され、受け入れられ、実行されるかということであり、メダル数の獲得が主の目標となるのではなく、「する、みる、支えるスポーツ」社会の実現の努力が求められているといえるのではないかと思う。

2　体罰を考える

学校部活動が選手育成の重要な機会として置き換えられ、体罰が容認され教育的意義がおろそかになるようであれば結果としてオリンピック招致が成功と言えるか疑問である。

平成23年度公立学校教職員の人事行政状況調査の調査結果1）によれば、体罰による被処分者の状況は、小学校20.0％、中学校44.6％、高等学校34.4％であり、すべての校種で体罰が存在するという実態がある。また、学校における体罰の発生状況は、授業中33.4％、部活動26.7％と授業中の報告がもっとも多い。

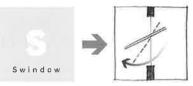
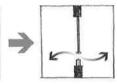
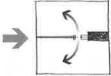
このデータからは、スポーツ指導に関わって発生する体罰以上に生徒指導上に関わって発生する体罰が存在するということが伺える。

運動部活動を積極的に指導する教師　は、その指導力への期待から生徒指導の役割を果たす機会も多く、問題行動を起こす生徒への対応の機会も多い。社会規範を守れず問題行動を繰り返す児童生徒への懲戒権の行使は、他の生徒の安全及び学習環境の保証という点からも重要であるが、懲戒と体罰の違いを認識しておくことが求められている（資料１）。

私自身が一連の報道を通して、まず、感じることは、体罰はあってはならないという前提の上ではあるが、処分されるリスクを冒して児童生徒と向き合っている教師の指導意欲が低下

資料１　体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について（通知）」（平成25年3月13日）

別紙　学校教育法第11条に規定する児童生徒の懲戒・体罰等に関する参考事例（部活動の事例を抜粋）

(1) 体罰（通常、体罰と判断されると考えられる行為）
　○身体に対する侵害を内容とするもの
　　・部活動顧問の指示に従わず、ユニフォームの片づけが不十分であったため、当該生徒の頬を殴打する。
(2) 認められる懲戒（通常、懲戒権の範囲内と判断されると考えられる行為）（ただし肉体的苦痛を伴わないものに限る。）
　※学校教育法施行規則に定める退学・停学・訓告以外で認められると考えられるものの例
　　・練習に遅刻した生徒を試合に出さずに見学させる。
(3) 正当な行為（通常、正当防衛、正当行為と判断されると考えられる行為）
　○他の児童生徒に被害を及ぼすような暴力行為に対して、これを制止したり、目前の危険を回避するためにやむを得ずした有形力の行使
　　・試合中に相手チームの選手とトラブルになり、殴りかかろうとする生徒を、押さえつけて制止させる。

するのではないかということである。社会の常識が通用する環境では、教師も感情的にならず生徒とも適切な距離感が確保しやすいが、家庭環境や学力での問題を抱える生徒は、大人を試しているかのように時として挑戦的になったり、投げやりな姿勢を見せたりすることもある。教師も生身の人間であり、尊厳を傷つけられる発言や行為には怒りを押さえられない場面も時としてあるであろう。年齢を重ねることで、指導の幅が広がり「間をとる」ことで生徒を落ち着かせることができるようにもなると思うが、一方で職業を失うリスクを負ってまで他人の子と関わらない、決められた仕事の範疇で対応すればよいという選択をする教師が増えてしまうことも否めないのではないだろうか。「だめなものはだめ」を伝えることは教師である前にすべての大人が人として伝えていく必要があると言えるが、現実の多忙感と日々の戦いは教師を消耗させ、時に精神疾患においこまれるケースも少なくない。こうした事態に対して、学校で抱え込まず、警察等の外部機関と連携を図りながら、法的境界線を越えた生徒に厳しく対応していく「ゼロ・トレランス」などの指導方針への変更によって一定の成果もみられるようになったが、教育という場において、法的なサポートを求めざるを得ない現状に対して、できれば、教育的指導の段階で立ち直らせたいと感じている教員も少なくないと思う。生徒と向き合う教師の姿勢を是とし、体罰によらない指導の在り方をサポートしていくことが必要と言えるであろう。

3　体罰によらない指導を目指して

生徒指導上の理由に起因する体罰と部活指導における体罰は、目的や理由が決定的に異なるものではあると思うが、体罰によらない指導を考える上では共通している部分も多いとも思う。一定の規則や罰によって行動を制限することは、秩序を保つ上で必要であるが、一人一人の価値観を育てて行かなければ、罰の量を拡大していく方法、規定を細分化していくことでしか制御ができなくなってしまう。

このことを部活動指導に当てはめて考えてみると、モチベーションを上げるための恫喝は、さらなる恫喝を生み体罰に頼る指導に変化せざるを得なくなる。意欲の高め方は外発的動機付けによらず内発的動機付けを高める指導への変化の必要性が指摘されることも多いが、中学校、高等学校期の自我を確立する時期においては、体罰を用いた指導による効果が本人の自覚を促す指導より、一時的な効果として勝敗に影響することも否定できない。現実に「恫喝することで勝っている」と認識している指導者へその効果は一次的なものであり、バーンアウトを生む原因となると説明しても理解を得ることが難しい場合もみられる。生徒指導も同様で、汚れ役を誰かがしなければ学校が崩壊するという危機感や責任感が体罰も辞さない指導の理由であろうと思う。体罰をする教員は、基本的には情熱や信念があるのだと思う。その情熱の向け方、信念の持ち方が教育現場で是とされるのかが問われている。答えは否であることを真摯に受け止めたい。

スポーツ指導に携わる私たちの多くは、スポーツエリートである。国体やインターハイに出場した経験がなくても、一般の方からみれば動ける体をもち、スポーツの場面で恥ずかしい思いはしてこなかったのではないか。スポーツの場面で自分を追い込み、あるいは追い込まれた経験が今にいきていると確信している。部活動があったから今の自分があると信じているので、その良さを伝えたいと思う。このことは間違いではないが、体罰を受けたが、その指導の中で自分が変わった、あるいは成長したと思える経験が体罰の連鎖を生む一因にもなる。一方で、その指導に疑問を感じスポーツから離脱していった人々もいることを忘れてはならない。「勝つため」という理由で、自身が受けた指導を基準として、その枠にはまらない生徒を切り捨てることは教育的活動とは理解されないのではないか。これまでの自身の経験からの呪縛を解き、指導方法の幅を広げていくことが真の意味での指導者となりえる資格ではないだろうか。さらに、本来のスポーツとの向き合い方は、3年間という限定的なものではなく、自らの意志で継続するスポーツ実践者を育てているはずである。

また、学習指導要領が目指す「生きる力」の育成のための機会であり、生徒自らが進んで加入している活動であるからこそ学校教育活動として位置づけがあるのであるということを念頭に置かなければならない。このためには、短い期間で成果が求められる風潮を見直すことも重要であろうと思う。例えば、対戦成績のみが指導力の基準ではなく、卒業後のスポーツの継続者数や部活動体験が自身の人間形成への貢献度を卒業後に測定していくという仕組みづくりも必要と言えるのではないだろうか。

体罰によらない指導によって、世界に羽ばたくオリンピアンが運動部活動から育っていくことが、2020年東京オリンピックに向けてのレガシィとなることを期待したい。

日本ハンドボール協会創立75周年記念誌刊行に寄せて

ある大学のハンドボール愛好者に声をかけられた。「75周年記念誌が図書館の書架にありハンドボールが頼もしく思えました」。嬉しい話。「で、目を通してくれた？」「いや、時間がなかったので…」。ぜひ近いうちに読んでください。そして広めてください。すでに、多くの方が「記念誌」を手に取られています。周辺の友人に勧めていただければ幸いです。ハンドボールに限らず、スポーツには内外様々な歴史があり、その一つ一つに競技者・愛好者の情熱が刻み込まれています。それを識（し）ることで親しむ興味は一段とつのります。

日本ハンドボール協会は、これまで1987年3月に協会創立50周年記念事業として「日本ハンドボール史」を、1998年3月に「創立60周年記念誌」を編集・刊行しました。50周年では「協会史」とせず、日本のハンドボールの歩みを探り証言を集めることに編集委員の意見はまとまりましたが、検討に時間をかけた思い出があります。「60周年誌」をはさんで今回は「日本ハンドボール史」の〝続編〟的な意味を持たせました。

それでも、宿題ともいうべきハンドボール伝来から日本協会創立までの15年間（1922～37年）は埋められませんでした。この期間、日本のハンドボールは競技スポーツではなく、学校体育として評価が高く、「教材スポーツ」的な性格で普及しています。高等女学校（高女）、中学校（旧制）におけるハンドボール―当時は「手球」とも呼ばれていたが―の授業風景の写真や資料を求めたのですが入手できず、今後に持ち越しました。

その一方で、1930年、神奈川県立横浜第一高女（現・神奈川県立横浜平沼高校）に「ハンドボール部」が発足したという資料が見つかっています。明らかに競技スポーツとしてとらえた活動で、対外試合の記録が残っていれば、日本で初の試合にもなるわけです。そこまでの事実は得られませんでしたが〝追跡〟する価値は十分です。

球史は、掘り下げるたびに新たなテーマを浮かび上がらせます。記念誌を読んで気づかれた〝謎の部分〟があれば、次の機会の参考にしたい。いや、そうした思いの方が数多く編集委員に名乗りを上げて欲しい。

これまで空白に近かった1943年秋から2年ほどの状況は、萩原一次氏（東京）が「個人的な範囲だが…」とされながら綴ってくださいました。「終戦（1945年8月15日）が10日遅ければ、自分も航空隊（戦地）に行くことが決まっていた」（238ページ）との一節は重く、胸がしめつけられます。

社会の変化も手伝って、終会・休会になった全国規模の大会記事は編集委員会が一括担当しました。全大会全試合に無数のエピソードが秘められているのは確かですが、「日本ハンドボール史」で触れた部分もあり、当事者による特集は見送りました。

1963年の「7人制一本化」から50年がたち、企画上で「11人制時代」の比重は軽くなっています。それも、ある意味で「75年」の歳月を物語るのです―。

杉山　茂・記念誌編集委員

戦中。練習なき、試合なき日々

萩原一次（元・日本ハンドボール協会理事）

238

75周年記念誌の誌面より

入手について

1. **書籍体裁**：B5版　620頁
2. **頒布価格**：10,500円（消費税込、送料別*）
　* 地域、数量により送料は異なります。
3. **記念誌購入申込方法**：申込用紙（日本協会HPよりダウンロードしてください）に、必要事項を記入の上、日本協会事務局までE-mail または、FAX（03-3481-2367）にてお申し込みください。
4. **送付方法**：ご指定の送付先に宅急便にて配送いたします。
5. **お支払方法**：記念誌送付時に同封の郵便振替用紙にて、ご送金ください。

※なお、記念誌は限定制作のため、頒布数に限りがあります。予定数に達しましたら終了と致しますので、予めご了承ください。この件のお問い合わせにつきましては、日本協会事務局までお願いいたします。

主な目次

スコアルーム①

第40回全国高等専門学校ハンドボール選手権大会

開催期日：2013年8月17日(土)～18日(日)
会　　場：青森県・十和田市

▼ 予選リーグ第１ブロック
大阪府大高専 29（15－7、14－14）21 有明高専
大阪府大高専 24（14－15、10－6）21 高知高専
高知高専 29（14－11、15－15）26 有明高専

▼ 予選リーグ第２ブロック
函館高専 27（19－5、8－7）12 一関高専
函館高専 20（10－13、10－6）19 北九州高専
北九州高専 28（14－9、14－6）15 一関高専

▼ 予選リーグ第３ブロック
石川高専 28（12－6、16－12）18 八戸高専
石川高専 32（18－6、14－11）17 東京高専
八戸高専 23（10－3、13－8）11 東京高専

▼ 予選リーグ第４ブロック
徳山高専 30（17－7、13－5）12 仙台高専名取
徳山高専 31（13－9、18－8）17 豊田高専
豊田高専 34（20－3、14－14）17 仙台高専名取

▼ 準決勝
徳山高専 25（10－8、15－8）16 石川高専
函館高専 23（12－4、11－12）16 大阪府大高専

▼ 決勝戦
徳山高専 22（10－8、12－13）21 函館高専

スコアルーム②

第42回全国中学校大会

開催期日：2013年8月20日(火)～23日(金)
会　　場：愛知・豊田市

【男　子】

▼ 1回戦
明倫(福井) 31(14－8、17－7)15 高砂(兵庫)
神森(沖縄) 30(15－10、15－16)26 桔梗(北海道)
総社西(岡山) 24(14－9、10－10)19 日吉(長崎)
大体大附(大阪) 31(15－7、16－15)22 四日市南(三重)

▼ 2回戦
明倫(福井) 32(16－12、16－12)24 菰野(三重)
岐陽(山口) 25(12－12、13－9)21 富岡西(群馬)
前林(愛知) 31(18－12、13－12)24 東根第一(山形)
神森(沖縄) 32(12－16、20－12)28 培良(京都)
手代木(茨城) 36(15－14、21－10)24 総社西(岡山)
滝ノ水(愛知) 19(11－9、8－9)18 塩江(香川)
大分(大分) 21(13－10、8－8)18 けやき台(茨城)
西條(富山) 24(11－10、13－11)21 大体大附(大阪)

▼ 準々決勝
岐陽 27(11－10、16－16)26 明倫
神森 29(15－7、14－12)19 前林
滝ノ水 24(17－8、7－11)19 手代木
西條 28(12－13、10－9)27 大分
(2－3、4－2)

▼ 準決勝
神森 27(17－11、10－13)24 岐陽
西條 23(7－7、16－8)15 滝ノ水

▼ 決　勝
神森 26(13－10、13－12)22 西條

【女　子】

▼ 1回戦
培良(京都) 24(13－11、11－12)23 松橋(熊本)
粕屋(福岡) 15(6－5、6－7)14 下津井(岡山)
(2－1、1－1)
けやき台(茨城) 23(10－8、13－10)18 西條(富山)
山梨北(山梨) 22(9－7、13－8)15 見前(岩手)

▼ 2回戦
西中原(神奈川) 24(11－11、13－10)21 培良(京都)
高岡(愛知) 17(8－6、9－7)13 凌雲(北海道)
氷見十三(富山) 24(10－10、14－9)19 上野(愛知)
大住(京都) 29(11－8、18－10)18 粕屋(福岡)
神森(沖縄) 27(10－11、13－12)26 けやき台(茨城)
(2－2、2－1)
平田(山口) 19(12－8、7－8)16 西笹川(三重)
香川第一(香川) 23(9－6、14－7)13 高南(大阪)
平針(愛知) 25(12－11、13－9)20 山梨北(山梨)

▼ 準々決勝
西中原 29(17－6、12－5)11 高岡
大住 19(9－13、10－5)18 氷見十三
平田 28(10－5、18－9)14 神森
平針 23(13－6、10－8)14 香川第一

▼ 準決勝
西中原 23(10－9、13－7)16 大住
平田 16(11－3、5－10)13 平針

▼ 決　勝
西中原 18(9－6、9－10)16 平田

スコアルーム③

第15回全日本ビーチハンドボール選手権大会

開催期日：2013年8月24日(土)～25日(日)
会　　場：兵庫県・神戸市

【男　子】

▼ 予選Ａブロック
ボンチフェローズ(大阪) 2－0 ＨＣ同志社(京都)
ボンチフェローズ(大阪) 2－0 海自江田島(広島)
ＨＣ同志社(京都) 2－1 海自江田島(広島)

▼ 予選Ｂブロック
ＨＣ大阪(大阪) 2－1 東海Weed's(愛知)
ＨＣ大阪(大阪) 2－0 神戸国際大学(兵庫)
東海Weed's(愛知) 2－1 神戸国際大学(兵庫)

▼ ５位決定戦
神戸国際大学 2－0 海自江田島

▼ 準決勝
東海Weed's 2－1 ボンチフェローズ
ＨＣ大阪 2－0 ＨＣ同志社

▼ ３位決定戦
ボンチフェローズ 2－0 ＨＣ同志社

▼ 決　勝
東海Weed's 2(14－12、10－11)1 ＨＣ大阪
(4－2)

【女　子】

▼ 女子Ｃブロック
日本体育大学(東京) 2－0 凪見鶏クラブ(兵庫)
日本体育大学(東京) 2－0 東海Weed's(愛知)
凪見鶏クラブ(兵庫) 2－0 東海Weed's(愛知)

▼ 女子Ｄブロック
SHINE(茨城) 2－1 あぶらおおめ(東京)
SHINE(茨城) 2－0 まるもっこりん(兵庫)
あぶらおおめ(東京) 2－0 まるもっこりん(兵庫)

▼ ５位決定戦
東海Weed's 2－0 まるもっこりん

▼ 準決勝
日本体育大学 2－0 あぶらおおめ
SHINE 2－0 凪見鶏クラブ

▼ ３位決定戦
凪見鶏クラブ 2－1 あぶらおおめ

▼ 決　勝
日本体育大学 2(15－2、8－6)0 SHINE

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」9月入会・継続会員

【東　京】土田　健、平賀とみ子、杉山　茂、三善信明**【神奈川】**種村明彦**【愛　知】**禰津行雄、田中基明、城山秀美、岡山尚司、岡山美恵子、西　みどり、牧野千別、滝　守功、山田美佐子**【大　阪】**折橋裕智**【和歌山】**大橋吉次**【広　島】**青戸克好

【11月の行事予定】

【会議】

11月9日(土)　常務理事会（東京）

【大会】

11月23日(土)～27日(水)
高松宮記念杯男子55回
・女子48回全日本学生選手権大会
（山梨県・甲府市、山梨市）

HAND BALL CONTENTS Nov.

（登録チームの購読料は登録料に含む）

（公財）日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』第五三九号

平成二十五年十月二十六日印刷
平成二十五年十一月一日発行

東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 代表 〇三ー三四八一ー二三六一
振替 〇〇一二〇ー七ー一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円